



あふくしき

台

十花

早力所添人安所添ぬきけ若院也り

有正公法

1匁5  
438







まともみちののろけと赤うろけの事成し赤の  
けけに常のろけけ也白うろけもあやをみち乃  
かろけとさる也赤松乃と紅梅のろけとさる同  
しなり

一回草子よりうろけをありはちのまきとせしるおけが  
とどろと名付てりふたまりうだきうり多卯のたど  
し乃滲糸いおとりの滲さう九三願とさぶつくとさ  
あり右のおけがとさるに依のあやと滲の下のりど  
のまきとさる也刀だまりに款のりとさる也おけがと  
さるに依とさるのうろけとさるに依とさるに依と  
ありすべしと胸と云ハ胸をりうろけとさるに依とさるに依と

扱也扱はよして扱うると扱扱と云深皮ぞんすおけと  
て包うると包胸と云一枚よおのべるとおけがとさると  
云袖も兼すりもあやをへか胸と云扱扱と云胸  
とさるに依とさるに依とさるに依とさるに依と  
り付と滲は用らおけなり

一 同草子よまきとさるに依とさるに依とさるに依と  
ハ扱扱と云く扱の各ありは事ハ平義扱扱とさるに依と  
さるとハ扱の形也とさるに依とさるに依とさるに依と  
ありありと云ハ槽文と云木形と云とありて扱扱と  
うろけおけいてとさるに依とさるに依とさるに依と  
まきとさるの形の扱とすりうろけ今世と云ハ扱と云

ら金と云は是と云者すすどと云は海と云いすす  
すりとあるハ物ノ車と云ハあす今世物ノ車と云  
云ハハ丈物又ハ介國と云ハ返りある結布の物と云  
織りよる物多けきを知玉の物乃故といふ車也と云  
孤物といひ物也成るべし

一 同草子と云ハ物ノ車と云ハあす今世物ノ車と云  
物也と云ハ厚くすき通るぬ物ハ不ろよせぬ也との  
とけを不ろと云ふて夫と云物也あつてはま  
通るハハむらうの方と云ハすきと云ハ車也ぬ之後  
の不ろ綿の不ろたを云ハ不ろ此用方と云ハすきと云ハ不  
ろの用方中と云ハすきと云ハ車也ぬの物也ぬ物也  
と云書く事也

一 物の車と云ハ物ノ車と云ハあす今世物ノ車と云  
物也と云ハ厚くすき通るぬ物ハ不ろよせぬ也との  
とけを不ろと云ふて夫と云物也あつてはま  
通るハハむらうの方と云ハすきと云ハ車也ぬ之後  
の不ろ綿の不ろたを云ハ不ろ此用方と云ハすきと云ハ不  
ろの用方中と云ハすきと云ハ車也ぬの物也ぬ物也  
と云書く事也

る書もけよある事もある也よれを新井筑後守源君  
美が軍器考もたりとの草子田村宗子秀郷弟子  
あくと引用する草子類もこれ極まるあり捨(きり)の  
あり論語の素讀も滑りあくらあり仍もありし人  
もろや草子物信あごとをふぶし(用)よとす俗  
本もえりたらずとあかしくもふれどあかしくも  
智見乃廣くある事ありし(書)籍をとりきくひな  
く見よよ書あり学者乃多き人よからの事あり  
知く我が恒心國乃日本の事とバ何もあかぬ人多し  
是和書ありとくあかづりきくひるぬ物とする和書  
隣の家乃事と若書よしと我家乃事ありし(書)ひよる

が如しそれありし(書)智ありといふ(書)きき  
一人乃ゆへに送(書)書状とを(書)書(書)終(書)後(書)えし(書)め(書)る(書)終(書)ま  
で(書)讀(書)く(書)文(書)を(書)愛(書)し(書)る(書)ず(書)や(書)文(書)字(書)書(書)を(書)送(書)へ(書)あ(書)き(書)や(書)る(書)る  
べ(書)て(書)え(書)る(書)也(書)し(書)或(書)人(書)養(書)子(書)を(書)し(書)ら(書)る(書)事(書)と(書)賀(書)し(書)て(書)贈(書)り  
お(書)も(書)ける(書)也(書)今(書)夜(書)也(書)養(書)生(書)也(書)門(書)元(書)也(書)成(書)公(書)と(書)書(書)り(書)養  
子(書)と(書)養(書)生(書)と(書)書(書)送(書)り(書)凶(書)事(書)の(書)状(書)乃(書)如(書)く(書)る(書)書(書)く(書)あ(書)か(書)る(書)  
笑(書)也(書)又(書)或(書)人(書)贈(書)り(書)物(書)と(書)如(書)く(書)る(書)書(書)送(書)れ(書)る(書)也(書)後(書)も(書)あ(書)か(書)る(書)也(書)  
書(書)り(書)る(書)後(書)と(書)如(書)く(書)る(書)書(書)送(書)り(書)也(書)人(書)の(書)贈(書)物(書)と(書)如(書)く(書)る(書)也(書)  
ぬ(書)や(書)も(書)い(書)る(書)也(書)又(書)い(書)や(書)し(書)く(書)也(書)也(書)知(書)る(書)事(書)也(書)也(書)用(書)し  
一新安手簡 新井筑後守 水戸ノ藩臣安積 日陸奥列五十餘郡  
賞兵場トノ手簡ヲ集ルナリ  
乃(書)事(書)年(書)來(書)心(書)然(書)り(書)也(書)也(書)免(書)角(書)知(書)兼(書)以(書)仙(書)臺(書)在(書)た(書)快(書)の(書)也(書)



本意の記に引ゆるに平家物語常用集もいふに也  
よも一徳も立可なりねむ十四郡と申す事高し  
余り少く後ゆは後思名と申す事申す事○先  
陣中ゆはる時未だ徳の諸とせし人の奥ハ六郡と一徳  
つてせし事也徳教と奥六郡の事といひしはゆ人  
也昔ハ六と三十六郡ありしと後ハ六九百十四郡といり  
らて押領しき事といひしはゆ人といひしはゆ人  
事もある事と申す事といひしはゆ人の名も形りゆ  
とも久しき事といひしはゆ人の名も形りゆ  
年必懸りて大なる沿革ハゆありゆとも建置の年代ハ  
免角とゆはる事ハ三ヶ条の事ハゆ示し領ゆりゆ大

幸ハ以上新井氏  
手管也

○貞丈云右ノ所謂先陣ハ新井氏  
乃昨木下順庵也安積ハ逆簡ハ思えす右ノ引平  
家物語の叙ハ十四郡たりゆも久しき事といひしはゆ人  
伝濃前月乃長乃仍也乃長ハ後平家院沙代の人也  
七徳乃舜と二ツとすきとる徳の冠者といふゆ人也  
ゆきハ隆興と申す郡といふ事後平家院沙代とて  
ゆありし事ゆり

一除目除目と云ふものあり又籤籤と書く或書ら云は前除目  
小折紙任と書付ケあり也又とらひし紙札も字  
一箋のさしつけ札のありし事と執事巻  
物も字し天子もも也扱一人との口宣と職事書出



世に曰ふ乃役人下論論と語るに反上の座より下と  
不寸也筭と云物ハ木と細く一尺許の四角よりして  
とと細くして之と云人形を削り別紙札と云  
ませり○除目ノ書ニ筭又籤ノ字アリ仍写之猶可正

一焼鯉 新撰樂記云七所許者食飲愛酒女也所好何物  
鷄月也飯基眼粥鯖粉切鰯酢煎鯛中骨鯉丸焼と  
見たり俗に鯉と云焼く食さる物と云此道と云右  
の文と云れを庖丁家之紀と云燒きみち事記ありて  
一回舎人の調子何と云あると云ハ何と云急あると云ハ  
河の焼くも多也又何と云ありと云ハ何と云ハ何と云  
あると云河の焼くも多也又何と云すべいと云ハ何と云す

べき也きとい音相通也源氏物語松葉子もべいと云河  
あり又何と云たつけと云ハ何と云ありきと云河の焼  
くも多也いっただけと云もいひきりきと云河の焼く  
も多也又うつちやると云ハうち屋と云河の焼くも多  
あり物此にか河焼くといやしく云あるあり

一剃髮 古事記垂仁天皇記曰爾其后有リ務知ル其情ニ  
悉シ剃リ其髮ヲ以テ其髮ヲ覆フ其頭ヲ亦ニ腐シ玉ヲ緋ニ三重纏テ手ヲ且ニ以テ  
酒ヲ腐シ御衣ヲ如シ全キ衣服ノ如此ニ設テ備フ而シテ抱キ其ヲ御子ヲ刺シ出ス城  
外ニ爾ノ其ノ力士等取リ其ノ御子ヲ即チ握リ其ノ祖爾握リ其ノ御髮者  
御髮自落握其ノ手者玉緋且絶握リ其ノ御衣者御衣便  
破ス ○負文曰ク女ノ髮ヲ剃テ尼ニナル事ハ佛法

渡リシ以來ノ事也此垂仁ノ后ノ時ハイマ夕佛  
法渡ラザル時ノ事ナレバ尼ニナリ給ヒシニハ  
アラズカ士ガ髪ヲ取テ城ノ外ヘ引出シ奉ラニ  
事ヲ恐レテ髪ヲ剃テ其髪ニテ頭ヲ覆ヒ給ヒシ  
也此時ステニ髪ヲ剃ル事アリ

一堅真木 古事記雄略天皇記曰初太后坐日下之  
時皇日下之直越道幸行爾登山望國內者有上  
堅真作合屋之家天皇令問其家云其上堅真作合  
者誰家答曰志茂之大縣主家爾天皇詔者奴乎已  
家似天皇之御舍而造即遣人令燒其家之時其大  
縣主懼畏誓首白奴有者隨奴不覺而過作其畏故

能美トハ  
叩頭也  
謝罪也

獻能美之御幣物能美ニ布繫白犬著鈴而已カヤカラ  
謂腰佩人令取大繩以獻上故令止其著火ツルイヲ

○負丈曰堅魚ハカツ木也カヤフキ菅ノ屋ノ上ノ棟

ニ木ヲX如此作テ置クヲ風木ト云フ風テチ

風ヲコチト云疾風ヲハヤチト云チトハ風也屋ヲ風

吹ヤフラレザラニタメニ置ク木ナルユハチギト云

此風木ノ動カヌタメニ木ヲ横ニアテ、風木ヲ

助ケ堅ムル木ヲカツ木ト云フ也カツヲ木ト

ハカタムル木ト云事也ムルノ二語ヲ約レバム

トナルムトウ音相通ズル故カツウ木ト云ウト

ヲ音相通ズル故轉ビテカツヲ木ト云堅真木鯉

木ナド、書クハ詞ニ付テアテ字ニ書タル也風

神代卷

木ヲ子木ト書クニ同シカツヲ木ハ堅木ト書ヘ  
シ奠ノ字ヲ加ルニ及ハザル也古事記ニハ堅魚  
トバカリアリ木ノ字ヲ畧シタル也上古ニハ堅  
奠トバカリ云シナルヘシ上古ニハ貴賤ノ家皆  
茅菅也故ニ風木アリ古事記ニ據レハカツヲ木  
ハ天子ノ御殿ナラデハ上ザル法ト見エタリ後  
代茅菅ナラヌ神社ニ子木鰹木ヲ置クハ誤リナ  
リ子木鰹木上古ニハ神社ニ限ラザル事ナリ子  
木ハ風木也ト云ハ桂秋齊カ發明也カツホ木ハ  
カタムル木也ト云フ事ハ予カ考也  
一伊勢内宮外宮 古事記 上卷 曰次登由宇氣神此

者坐<sup>ハイヌ</sup>外<sup>トツ</sup>宮<sup>ノ</sup>之<sup>ヲ</sup>度<sup>ワタラシ</sup>相<sup>シ</sup>神<sup>ノ</sup>者<sup>ナリ</sup>也ト見エタリ古事記ハ四  
十二代元明天皇ノ和銅五年ニ太<sup>ヤスマ</sup>朝<sup>ノ</sup>臣<sup>ハ</sup>安<sup>カ</sup>萬<sup>ロ</sup>侶<sup>ガ</sup>  
撰<sup>シ</sup>ニ書<sup>キ</sup>也是元明天皇ノ御代ニ既ニ外宮ノ名  
アリ外宮ノ名アレハ内宮ノ名アル事ハ推テ知  
ルベシ然レハ内宮外宮ノ名ハ元明天皇ヨリモ  
猶先代ニ始リシナルヘシ和事始ニ内宮外宮ト  
稱<sup>ス</sup>多<sup>ク</sup>シハ村上天皇<sup>六十一</sup>代<sup>ノ</sup>乃<sup>チ</sup>伊<sup>ハ</sup>弉<sup>ノ</sup>祭<sup>ノ</sup>主<sup>ト</sup>公<sup>ノ</sup>箭<sup>ノ</sup>時<sup>ニ</sup>  
皇大神ハ皇座<sup>ワタラシ</sup>なる<sup>ニ</sup>内宮ト稱<sup>ス</sup>一<sup>ニ</sup>度<sup>ニ</sup>會<sup>ハ</sup>宮<sup>ノ</sup>ハ<sup>ハ</sup>伊<sup>ハ</sup>弉<sup>ノ</sup>  
なる<sup>ニ</sup>外宮ト稱<sup>ス</sup>多<sup>ク</sup>シハ始<sup>メ</sup>と<sup>シ</sup>神<sup>ノ</sup>名<sup>ヲ</sup>秘<sup>シ</sup>書<sup>ス</sup>ト<sup>シ</sup>テ<sup>シ</sup>  
且<sup>ニ</sup>何<sup>レ</sup>ノ<sup>ハ</sup>貞<sup>ニ</sup>丈<sup>ニ</sup>云<sup>フ</sup>古<sup>ノ</sup>事<sup>ノ</sup>記<sup>ノ</sup>乃<sup>チ</sup>文<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>考<sup>レ</sup>シ<sup>ハ</sup>神<sup>ノ</sup>名<sup>ヲ</sup>  
祕<sup>シ</sup>書<sup>ス</sup>ノ<sup>ハ</sup>説<sup>誤</sup>ナリ

一秀吉器量 秀吉朝鮮ヲ攻テ後ニ大明ヲ攻取ニ  
ト欲シタルハ器量大ナル人也ト云テ稱美スル  
人多シ 負丈云是器量大ナルニハ非ス器量ハ  
小クシテ欲心深ク大ナル人也器量ト云ハ才智  
也秀吉ハ無學文盲ナル人ニテ惡才邪智有リ善  
才正智ナシ唯虎狼ノ如ク武威ヲ張テ人ヲ怖畏  
セシメテ國ヲ治ントス假令朝鮮ヲ拔キ取タリ  
トモ何ノ徳有テ歟其後ヲ能ク治シ況ヤ大明ヲ  
ヤ治術ヲ知ラスシテ大國ヲ得ニ事ヲノミ欲ス  
是欲心ハ無限廣大ニシテ器量ハ甚小キ人也  
一龜ト 三代實錄卷二十一清和天皇負觀十三年

夏四月廿四日癸亥宮主從五位下兼行丹波權掾  
伊伎宿禰是雄率是雄者壹岐嶋人也本姓卜部改  
為伊岐始祖ヲシミ足尾命スウシ始自神代ニミト供龜カメ事厥後  
子孫傳習祖業備於卜部是雄卜數之道尤究其要  
日者之中可謂獨歩○負丈按右之文始自神代供  
龜ト事トアル龜ノ字ハ誤ナルヘシ神代ニ龜ト  
ハ無之古事記日本紀ニ見エス神代ニハ天香山  
之真男サマノ鹿之肩シカノヲ全拔ニシテ天香山之天アマ婆ハハ之迦カ  
ヲ取テトフ是ヲ太フタ台タテト云フ古事記ニ見エ多リ  
龜トハ欽明天皇御代以來ノ事也欽明天皇二十  
四年百濟國へ使ヲ遣サレシ時詔シテト書曆本

種々藥物可付送ト來給ヒシ夏日本紀ニ見エタ  
リ然レハ龜トハト書渡リタル以來ノ事ナリ神  
代ニハ無レ之

一農民ノ住居スル處ヲムラト云フ村ノ又物ノ評  
均ナラザルヲムラト云不平物ノ一處ニ集ルヲ  
ムレト云ムレト云ハムラ何レモムラト云フハ  
ムラガルナリ群ノムラガルハ物ノ多ク集ルヲ  
云フ也漆物ニ村濃ト云モ白地ニ何色ニテモ一  
處ニ濃ク漆テ又遠ク間ヲ置テ濃ク漆ル幾處モ  
同レ如ク漆ル也是モ其色ノムラガリテ一處ニ  
集タル意也村雲村雨ナドモ一處ニ集ル意也村

雨モ間ヲ置テ一度ニ降來ル也村千鳥モ千鳥ノ  
集リ飛ブヲ云フ皆群ノ意也推テ知ルベシ又弓  
ノ村ゴキト云フモ一面不殘削ラズシテ間ヲ置  
テ處々ヲ削ル其削目一處々々ニ集リムラガル  
也人ノ半ハ正氣半ハ亂氣ナルヲ村氣ト云フモ  
正氣ト亂氣ト間ヲ置テ氣ノ集ルヲ云フ也  
一古き物諸乃詞よけしハ何れと云詞ありけし  
万葉ノ殊異あざの字と用わたりありやくふ  
とあり事あきといあり  
雨夜物語民詞藤  
原宇麻佐カ説  
一亂んごせあきと云ハ何れと云けしハ何れと云  
惱車あり也 同上



之と本と初より一大意乃人ハ別よきる腹家ノ昔を  
大意小意の人トカクく定められしとを大意小意の  
事々大掌會便蒙りて考魚

一 欲ノ字儒書ニテホツスルトヨム本語ハホルル也ホ  
リスルトモ云万葉ニ見エタリムサボルト云モ  
ムサクホル也ホシキト云モホリシキ也

一 道路里數ノ事勘者御伽雙紙云塵劫記ニ云曲尺  
六尺五寸ヲ一間トシ六十間ヲ一町トシ三十六  
町ヲ一里トス或人云伊勢道ハ四十八町ヲ一里  
トスト云傳ヘタリ近曾サイソウニ等士ノ説ヲ聞ニ伊勢  
道四十八町ト云ハ偽也馬子駕籠昇ノ類ハ爲ニ

スル事有ル故カ、リトイヒナス也東海道ノ里  
程ハ曲尺六尺ヲ一間トシ六十間ヲ一町トシ三  
十六町ヲ一里トス伊勢道ハ尺六尺五寸ヲ一間  
トスルノミタカヒニテ餘數ハ東海道ニ替ル事  
ナシト云ヘリ然レハ伊勢道ノ一里ハ六尺間ノ  
三十九町ニアタル也一里ニトニ三町多シ伊勢  
道ノ十二里ハ東海道ノ十三里ニ當ル也イカナ  
ル故ニテ四十八町ヲ一里トストイヘルソト考  
ルニ山田外宮宇治内宮ノ間四十八町アリ是ヲ  
所ノ人一里ト称スルヨリ起ルナルヘシト云ヘ  
リ又或儒ノ云西國ハ皆四十八町ヲ一里トスト

云へリ又延喜式東西兩京ノ大尺ヲ記スルニモ  
トツキテカゾフル時ハ一町ハ四十丈也若シ是  
ヲ六十間トスレハ一間ハ六尺六十六分有奇也  
一間ノ尺寸和漢共ニイフカシ

法軸カニニ東山殿ハ十三里ニ書  
右御伽双紙ハ等  
術士中根係之丞

一白雉ノ年号ヲシラキマス朱鳥ノ年号ヲアカシ  
ドリト日本紀ニ訓夕付タルハ後人ノ所爲ナル  
ベシ是ヨリ前ノ大化ノ年号ニハ訓ヲ付ケズ訓  
ノ付ラレヌ故ナルヘシ異朝ヲ學テ年号ヲ建テ  
ル、上へハ年号字音ヲ用ベシ國訓ヲ用ヘカラ  
ズ歌書ノ類其外カナニ書タル古書ニモ年号ハ

皆字音ヲ用ヒタリ近世ノ歌ヨニ誹諧師ナド、  
云者年号ヲ訓ニ書クハ故實ヲ知ラヌ也大化ノ  
如キヲオホバケト云ニハ聞ニクニ

一齊明天皇日本紀曰元年秋七月己巳朔己卯於難波  
朝饗北越蝦夷九十九人東東陸蝦夷九十五人并  
設百濟調使馬一百五十人仍授柵養柵蝦夷九人津州  
蝦夷六人冠各二階云云是ハ蝦夷國人乱ヲ起シ  
タル時召捕タル者又自ラ歸化シタル者共ヲ處  
々ニ配リ置シタル蝦夷等也蝦夷ノミニモ非ス  
三韓ノ人モ處々ニ配リ置テ召シ仕ハレシ事ア  
リ日本紀ニ見エタリ



一曆術ヲ不用シテ新曆ヲ作ル畧方ノ事 知曆之大概也

中根保之丞法舩カ著ス所ノ勘者御伽雙紙曰九

年以前ノ タトヘハ亥ノ年ノ曆ニハ 古曆ヲ取出

シ其二月ノ十五日ノ子支カ即當年ノ正月朔日

ノ子支也叔古二月ノ大小ヲ新正月ノ大小トシ

古三月ノ大小ヲ新二月ノ大小ト次第ニアツル

也又術ニ古曆正月朔日ノ子支ヲ見テ其月大ナ

レハ子ハ五ツ大支ハ九ツ小ナレハ子ハ四ツ

メ支ハ八ツメヲ新正月ノ朔日ノ子支トスル也

タトヘハ古曆正月朔日甲子ニテ大ナレバ戊申

小ナレバ丁未ト心得ヘシ叔二十四氣ハタトヘ

ハ古曆立春甲午ナレハ子ハ三ツメ支ハ七ツメ

ノ丙子ヲ當年ノ立春ト知ルヘシ但其氣ノ入ル

時刻ハ古曆ヨリ六七刻先立ユヘ古曆丑ノ二刻

以前ニ入ナラハ一日前ヲ取ヘシ如此シテ月ノ

内ニ中氣ナキヲ閏月ト定ル也又別ニ閏月ヲ推

ス術アリ前年ノ冬至ノ日數ヲ以テ定法二十九

日ノ内ヲ減シテ餘リタトヘハ四日アレハ四月

ニ閏アリト知ル也尤前年ノ冬至十八日以後ナ

ラ子ハ求ル年閏ナシ〇貞丈云延享ノ年中予カ

同僚蜂屋小十郎源定章 天文算數ニ通 輟耕錄ニ九年以

前ノ古曆ヲ以テ新曆ヲ作ル方アリ其事ヲ俗解

シタリトテ一冊ノ書ヲ見セタリキ讀タレトモ  
今忘レタリ今思ヘハ中根カ記セシ趣ヲ猶委シ  
ク記セシナラム乞テ寫ガリシ事悔シキ事也

一多ノ年數月數日數ヲ速ニ求ル事 右同書曰神  
武天皇辛酉ノ年正月朔日庚辰ニ御位ニ昂キ夕  
マフ夫ヨリ享保十六年等亥ノ正月朔日乙丑マ  
テ年月日ノ數ヲ問フ答云年數二千三百九十  
月數二万九千五百六十一〇日數八十七万二千  
九百廿六〇閏月八百八十〇法曰前ノ辛ヨリ後  
ノ辛マデカゾヘテ十一ヲ得ルヲ十八捨テ余リ  
一ヲ左ニ置又前ノ酉ヨリ後ノ亥マデカソヘテ

三ツヲ得ルヲ右ニ置右ノ數ニ十二ツ、重子加ル  
事其ハレタ左ト同數ニナルマテ加ヘテ 今四度加ナリ

五十一トナル叔神武天皇ヨリ大凡二十三四百  
ナル事ヲ前方ニ覺悟シテ先六十一甲子ツ、卅九

メガリ二十三四百四十ヲ加ヘテ二十三三百九十一  
年トシル又月數ヲ考ルハ右年數ノ内一ヲ減シ

テ定法二百卅五ヲカケテ五十六万千六百五十  
トナルヲ十九ニワレバ二万九千五百六十不

ナルヲ得ルニ一月加ヘテ月數ヲ知ル 但二百卅九  
トハ一章十九年ニ月數ニ右又日數ヲ知ル八月

數ノ内一ヲ減シテ定法二十九日五三〇六ヲカ

ケテ八十七万二千九百二十五日 不  
尽半日以上  
ヲ得ルニ一日ヲ加ヘテ日數ヲ知ル也 口  
扱合否  
ヲ試ルニ往古ノ正月朔日庚辰ヨリ後ノ正月乙  
丑マテノ數ヲ前術ニ 隨テ 四十六ヲ得ル扱右ノ八十  
七万二千九百二十六ヲ置六十二満ルハステ、  
不尽四十六ヲ得ル右ト同數ナルユヘ合算ト知  
ル也若シ否算ハ是ヲ相減シテ餘リ 前  
少ク後多  
キヲ減トス  
前多後少キ一カニカヲ得ル者ハ是ヲ得ル者ハ  
是ヲ以テ日數ヲ加減シテ答ル日數トス又北九  
及其前後ノ數ヲ得ル者ハ月數ニ一月ヲ増換シ  
テ 増換ヲ定ムル事別ニ前ノ如クシテ前年マテ  
ハ月數ヲ求メテ其月數ト求ル年ノ月數ト相

減余リ十二ヲ得ル者ハ一月ヲ増シ  
十三ヲ得ル者ハ一月ヲ換スル也 答ル月數ト  
又是ヲ以テ日數ヲ求ル事前ニ同シ又閏月ノ數  
ヲ知ルハ年數ノ内一ヲ去リ余リニ七ヲカケテ  
十九ニワリ不尽ハ捨テ閏月ノ數ヲ知ル也 但前  
換アル者ハ其増  
換ニレタガフ  
一神國 繪餘雜錄ニ列ク阜氏藻林云神列中國之  
地也為亦縣神列 下 貞丈梅赤字神字褒美ノ辭也  
吾國ヲ神國ト云モ褒美ノ辭ナラハ是也神道ト  
云フ道アル故ト云フハ非也又天神ノ神孫皇位  
ヲ兼繼テ他姓ノ者奪ガル故ト云モ未可也神國  
神道ト云フ祢ハ中古以來云出シタル歟上古ノ



感あるありき辞ハ何れも帥る事なくも直  
よき時代當世の辞と謂く述る也巧と用る事か  
くしてそのたつその時代の治乱盛衰善悪を随  
て自然の辞ハその也故よ後代も巧くも其  
時代の世辭風俗人情のよあつる人として感  
歎せしむ事あり偽作と云は後代乃詩歌也  
後代の詩歌を帥るべく教え才子をく其の題詠と  
し事出づる復日よ其景と詠し春日よ秋景  
と詠し愁なりして愁と詠し樂かして樂と  
詠しは席上よ座して遠國他郷の風景と詠す先  
是偽りなり親之當世乃近き詞と捨くを或は此

類と用ゆ故よ其辭法作ら事と專らとす虚懐を  
述へ虚辭と謂く人と擬ぶしめ人よ其のまん事  
と乃其好む偽としよ其偽とゆえざる類よ公と用く  
巧よそのと専らとす其虚懐と巧よし其虚辭と  
飾らんら多し詩学あり歌学あり是只浮華其  
めて阿まび事ハ一實用れく玉家の治乱盛衰善  
悪よ其心事ハ一人よと云むら其の虚と偽と  
實の如くも巧つらとほむら也是又浮華乃其善也  
今世を偽と巧よし人として指く詩人歌人と云天子  
より庶人よ其まもく詩歌を其偽言ハ巧よし其  
以て善とす事ありしき事也詩歌の

外乃世事の修言と巧す者何れを刑戮すぬり  
るまじき事也

一 志き修乃道 貞丈云我國の教と志き修乃乃とし  
車 上古の志を吹えんは代乃初也志き修乃日本乃  
一名の志道としゆる天下國家と修乃乃道也天下  
の教と修乃道ハ人倫の道也人倫乃道を聖人乃  
教の法也應神天皇の由代始く聖人の道修乃具  
て弘兼代々の天皇聖人の道弘布として我々の風  
俗よ修ひて斟酌して天下國家と修乃法と立て律  
令格式多と定めぬしとて修乃乃道とはいふ  
べけき神武天皇東征と始め代々乃天皇天下の教

と修乃乃公と修乃乃人乃修乃乃  
りみく修乃乃とて修乃乃道修乃乃教と志き修乃の  
道と志ハ教人乃修乃乃

一 棟札 贈餘雜錄曰上梁文自唐季始凡建官殿上  
梁之時頌美作室之意而書紙以置梁東西南北見  
剪燈新話及文天祥集國朝建神廟佛堂書檀越主  
名暨功德於札而釘棟梁相州建長寺虹梁銘宋隆  
蘭溪平時頼明寺書

一 昏礼ニハ俗ニ返ス出スト云詞ヲ忌ムハ婦ノ夫  
ニ別レテ返ル事昏家ヨリ出サル、事ヲ深ク耻  
トスルガ故ニ其詞ヲダニモ忌ムハ婦ヲ誡シム

ル意也然ルニ夫婦酒盃ヲ交ルニ返盃スル事近  
年俗間ノ習也昔ハ返盃セズレテ盃ヲ交ル礼アリ  
又替礼ヲ賀スル状ノ文ニ日出度ト書テ出ノ  
字ヲ忌ムヌト志ル別ニ文言アルヘシ又唐ニテ  
婦ノ替家ニ入ルヲ歸ト云ハカヘルノ訓義ニ非  
ズ字彙ニ入也トアリオモムキ入ルノ義也

一音ノ四聲ト云フハ平聲上聲去聲入聲也平上去  
ノ三聲ハ音ヲ引キ延ベテ唱ルニ其音ノ上リ下  
リノ差別也夕トヘバカキクケユノ五ツニテイ  
ハツカキクケユト音ヲ引延テ唱ルニカノアヲ  
長ク引テ唱ルハ平聲也アヲ長ク引カズレテア

ヲ強ク張テ唱ルハ上聲也アヲ弱ク弛テ唱ルハ  
去聲也右ノ如ク唱レハ平聲ハ上リ下リナク平  
ニエルヤカニ聞ユ上聲ハシリ聲上リテ強ク聞  
ユ去聲ハシリ聲下リテ弱ク聞ユ去ノ字ハ聲ノ  
末ノ消エ去ル心也入聲ハカキクケユトシリ聲  
ニツノ音ヲ含ミタルガ如クセハシク逼テ聞ユ  
ル也入ノ字ハ屈リ入テ伸ザル意也入聲ノ字ハ  
シリ聲ニフツ。名子。キ。ノ五ノ音ヲ含テシリ聲ツ  
マル也唐音ニテハ弥平上去入明ニ分ル也和  
語ニモ四聲アルガ故ニ古事記ニ本文ノ間々ニ  
去上等ノ字ヲ付タリ和語ニテモ常ノ言語ニ上

聲去聲モアリ平聲入聲モアリ今世ノ俗語ニ平  
聲ハ多ク田舎詞ニアリ歌ヲ謠フニ至テハ四聲  
明ニ分ル也和語ノ四聲ハ五畿内ノ人ノ詞ニ月  
ヲツキト云ハ去聲也キノ音下リテ弱シ關東ノ  
人ノ詞ニハ上聲也キノ音上リテ強シ畿内ノ人  
花ヲハナト云ハ去聲也ナノ音下リテ弱シ關東  
人ノ詞ニハ上聲也ナノ音上リテ強シ畿内ノ人  
ノ鼻ヲハナト云ハ上聲也ナノ音上リテ強シ關  
東詞ニハ去聲也ナノ音下リ弱シ雅語ニサリト  
云ヲ俗語ニサウシヤト云是サト云ヲ引延テサ  
ウト云ハ平聲也田舎人ノ詞ニサウタヨト云サ

ウダハ平聲也田舎詞ニツキコムト云フ事ヲツ  
コムト云ヒオシハナツト云フ事ヲオハナスナ  
ト、云。オモツモ入聲也餘ハ准シ知ルベシ又云  
畿内ノ人ノ詞ト關東ノ人ノ詞ハ上去ノ二聲相  
表裏スル也

一丹治比氏 國史并ニ姓氏錄ニ見エ夕リ夕子ヒ  
ト訓ム也此ヒノ字イト唱ヘシ天長九年夏四月  
丁亥木工頭從五位上多治比真人貞成等奏請改テ  
多治比三字爲丹墀兩字コト三代實錄ニ見エ夕  
リ丹墀ハ夕子也子ノ音ヲ延テ夕子イナリ夕子  
ヒ又夕子三トヨムハ訛ナリ  
丹墀二字ニハトヨ  
ムハ誤ナリニアカ



ニハトヨム  
ハ尚誤ナリ

一天神地神ト云フ差別ヲハ舊事紀ヨリ云出シ夕  
ル事也舊事紀ハ偽書也用ヘカラス日本紀古事  
記ニハ其差別ナシ後代舊事紀ニ據テ天神七代  
地神五代ト云フ也日本紀ニ神世七代古事記  
モ同シ  
ト云フ事ハアレ凡天神七代トハナシ巨勢彦仙  
カ本朝歴史略評註ニ天神七代地祇五代ト書夕  
ルハ弥誤也舊事紀ニ所謂ノ天神地神ト天神地  
祇トハ同義ニ非ズ天神地祇ト云フ天神ハ種姓  
ノ貴キ神ヲ云地祇トハ種姓ノ賤キ神ヲ云フ後  
代堂上地下ト云フカ如シ西上ニテ所謂ノ天神

地祇ト同義トスベカラズ吾國ト西土ト事物名  
ハ同シテ實ハ異ナル者アリ標ニ混一スベカラ  
ズ

一夕マギル 夕マシヒキユルノ略語也夕マハ魂  
也キルハ消也強ク驚クヲ云フ也田舎詞ニ夕マ  
ゲルト云ケハキエヲ約タタル也キエノ  
切音ケ古歌ニ雪  
消ヲユキケト云消エヌガ上ニト云フ事ヲケヌ  
ガ上ニトヨメル類也江戸詞ニキモヲツブスト  
云フハ鄙俚也田舎詞ニ夕マゲルト云ハ古雅也  
古風ナル事ハ田舎ニ多ク殘テアリ江戸ニハ漸  
々ニ移リ改ル

一音聲二律呂ト云フハ律ハ輕ク清ニ升ル聲ノ調子也呂ハ重ク濁リ降ル聲ノ調子也調子トハ聲ノ色也男ノ聲ハ呂也女ノ聲ハ律也男ノ呂ノ聲ノ中ニ又律呂アリ女ノ律ノ聲ノ中ニ又律呂アリ凡ノ人聲ノミナラス方ノ鳴リ物皆律呂アリ律ニシテ呂ヲ含ミ呂ニシテ律ヲ含ムアリ故ニ六律六呂アリ

一往安永七年戊戌四月比世間有流言曰若狹國民入山者偶見異僧僧謂曰今歲六七月將疫癘流行天下民人多死辛苦欲避之則須轉歲月所謂轉者須以五月晦為除夜以六月朔為元旦行賀儀矣諸

國傳聞之多有隨其說者江戶府下亦士庶多用其說者五月晦行儺如除夜六月朔行賀如元旦坊間市店休商開戶掛簾亦如元旦也可謂一怪事矣凡市店每元旦休商開戶掛簾或有喪事休商者亦然今歲己亥二月二十有四日吾將軍之儲君急病薨矣天下舉哀焉府下坊間市店皆休商開戶掛簾如去歲六月朔矣今思去歲之事蓋此缺北乎

一厩神 武士厩乃神也初リ人少一諸社根元記曰生馬神天德三年三月坐左馬寮〇扶桑畧記曰昌泰四年七月二日辛亥左馬寮乾角御坐從五

位下生馬神被加一階日本紀畧 諸社根元記曰保

馬神延喜三年三月十日坐右馬寮○右山城名勝志

小引多り坐馬神保馬神馬神乃神と厩乃神とすも也

日本紀ニ保食神乃頂りり牛馬化生牛馬乃車凡是

且生馬神ハ共ニ保食神乃別号牛馬只一神牛馬

まろや保食神粟稗稻麥豆等牛馬生牛馬トあり

ト日布化牛馬乃食神牛馬乃生牛馬ト依牛馬ト保食

神ト稱牛馬ト生牛馬ト依牛馬ト保食牛馬ト

保牛馬ト神ト稱牛馬ト依牛馬ト保食牛馬ト

一蠻繪古書小裙衣乃文或ハ調度乃文或ハ調度乃蠻

繪トシ乃蠻トシ乃蠻トシ乃蠻トシ乃蠻トシ乃蠻トシ

一云云壺井義知ガ傍注蠻當作盤九文ニシテ

其文不定トいハり 貞丈云中古以來乃書ハ字

義ニ拘ラずト音訓ト同トけキ彼ト是ト備

りト河ト字ト用ト例ト行ト器ト外ト衣ト書ト類ト

車ト圖ト孔子ト書ト車トありト蠻繪ト本ト盤繪

乃ト蠻ト乃ト蠻ト乃ト蠻ト乃ト蠻ト乃ト蠻ト

韻會蒲沿切蜀江三峽中水渡圓折者名曰盤トアリ

盤トハ盤トハ圓トハ圓トハ圓トハ圓トハ圓トハ圓ト

其形圓キ也依之もろキ文ト盤繪ト也ト也ト也ト也ト也ト

鸞ト鳳凰ト九獅子ト九龍ト九トの類ト也ト又ト汚物

のト陽ト梅ト九菊ト九草木花葉トも盤繪ト用

う草なるを

一唐草 かき草とく物の文<sup>ミ</sup>画くハ草乃蔓<sup>ツ</sup>のかき  
く多辨<sup>ハ</sup>のくかき草といふ草也唐士の草といふ  
草ハあはれかき草也云字ハ蔓草の二字と用ひ  
へき草あふふを何よけく唐の字とあて字を用  
ひききりり水類多し

一金塊集ハ編倉在大臣實朝との秘集也三冊あり  
金塊集云建暦元年七月洪水漫<sup>タ</sup>天<sup>ノ</sup>土民愁歎せん  
車と思ひて一人奉向<sup>本尊</sup>致<sup>ス</sup>祈念<sup>ヲ</sup>

時よりりすくを民乃なけき也八大新王<sup>ニ</sup>あ  
此歌<sup>ニ</sup>夫木抄<sup>ハ</sup>右略と初<sup>ニ</sup>はハ一車東<sup>ニ</sup>はハ見えず  
ニモ入ル

能く漏せりハ一又務射秘抄乃序大進物者海念  
右大臣家沙時權輿<sup>ノ</sup>文<sup>ヲ</sup>河<sup>ニ</sup>也是も東<sup>ニ</sup>はハ見えず  
す是等と<sup>ハ</sup>思<sup>ハ</sup>ん東<sup>ニ</sup>はハ記<sup>ス</sup>満<sup>ト</sup>ら<sup>ハ</sup>車<sup>ニ</sup>多<sup>ク</sup>ら  
ハ一又近世乃書ハ東<sup>ニ</sup>はハ見<sup>エ</sup>る<sup>ハ</sup>車<sup>ト</sup>と能<sup>ク</sup>たら  
書あり<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>近世の人乃偽<sup>ニ</sup>作<sup>ス</sup>疑<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>所<sup>ナ</sup>か  
き<sup>ハ</sup>後<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>き<sup>ハ</sup>一向<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>る<sup>ハ</sup>乃<sup>ハ</sup>す<sup>ハ</sup>  
日蓮安國論ヲ献セシヨリ  
外ノ事ハ東鑑ニ見エス  
一ハツイ 加<sup>ハ</sup>ま<sup>ト</sup>ど<sup>ト</sup>ハ<sup>ハ</sup>信<sup>ト</sup>を<sup>ハ</sup>車<sup>ニ</sup> 賤<sup>シ</sup>き<sup>ハ</sup>何<sup>ト</sup>ハ<sup>ハ</sup>  
す又回舎<sup>ハ</sup>何<sup>ト</sup>ハ<sup>ハ</sup>び禁秘抄ハ竈神ありハツイノ  
カニ也梁<sup>ハ</sup>蘆<sup>ハ</sup>愚案抄神樂抄ハ竈<sup>ノ</sup>殿<sup>ハ</sup>乃<sup>ハ</sup>新<sup>ニ</sup>何<sup>リ</sup>歌<sup>ニ</sup>云  
とよハツイ<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>び<sup>ハ</sup>車<sup>ト</sup>ハ<sup>ハ</sup>久<sup>ク</sup>の<sup>ハ</sup>天<sup>ノ</sup>乃<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>こと  
の色<sup>ハ</sup>す<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>ひ<sup>ハ</sup>乃<sup>ハ</sup>勢<sup>ト</sup>す<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>この色<sup>ハ</sup>す<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>何<sup>リ</sup>塙<sup>ニ</sup>後<sup>ニ</sup>英

百練抄後深草院室治二年十月廿二日内膳屋焼  
亡御竈神燒亡神代より傳りきる釜も燒えりか  
りれけりし見えりし禁秘抄ハ是より前の御製  
ありし竈神口ツあり破る但指合そと用之とあるハ  
これハ神代乃釜よりありし竈乃事と書とありし如  
延喜式江次第三代實錄等も竈神乃事云々あり  
活少納言松葉子あり宮よりありの住法獅子二匹大  
床子ありとて糸更紗帳の幕よりありしハ内膳傳  
へけりししよりありしと見えたり 又按  
ゆきしハかゝるの異俗ありし禁秘抄ハ金殿運湯  
とあり是等釜夜よりありし下月の湯湯と云ふ事也

一度<sup>ラビト</sup>羅人今昔物語卷十四云今をむくし海西に  
ける人商のしあり殺人船一艘ありと傳ふは  
て本國より歸りけるは鎮西の末申乃方よりありし  
るる乃傳ふたあるはありし人あり物ありを船  
の者どもは海に漕ぎとて食物のいそぎせんとい  
船にせりし海よりありし人あり多くの人乃あり  
其ありし思ひて又船ありしこれと云ふは山の方  
より男どもの鳥帽あり白き水干袴着しるが百餘人  
をより出ありし船の者どもは川にせりしはこれ  
せんといし船よりありしと云ふはいもどもありけり  
船中此者ハいそりしりる糸更紗と具ししを云ふ

箭とほびて何者とものかく追てあるを近くするハ  
射んとつゝを淋者ともいふともさうしうにふりしと  
思ひけんあえしきく山一峰に入るをり船の者ハ  
それとあして漕のやぬ徳西の峰と後世車と  
人ハ俗多し年老と若者いそくそれハ夜夜語といふ  
あり形ハ人うして人と食をありとて業内とす  
て手薄よりけハ集をあき殺してとてとせとこれ  
よと何と人の申すつとあてして人ハ似てとて  
物とく若者とを夜夜人といふ也とてちかて  
ちかつとすしてけとれを命とあき近きか  
を百子乃弓箭もとも彼多とてはくれあえか

一してとらされありやぞかうけは車ハ漢西の人  
あまのほりしちが俗りけは孤園つとてうつて人  
たると也。○負丈云世人身乃けは穢がまや女色  
飲食と好む人と一吞う何あともまひの者ととら  
者といふ右の夜夜人なりとて事也夜夜人といふ  
事ハ者りありし也近世の俗俗ハいはず

追考 日本紀齊明天皇紀隨羅國トアリ陸羅又  
云都貨邏ト見エタリ

一俳諧 古今和歌集雜躰之部ニ俳諧歌とあり是  
俳ノ字ヲ誤テ誹ノ字ニ作タル也俳ノ音ハイ也  
誹ノ音ヒ也俳ハ夕ハフレト訓ム誹ソシルト訓

△如是音モ割モ同シカラズ相通セサル字也玉  
篇能皮皆切雜戲也誹甫尾切誹謗也又字彙芳微  
切芳末切義同トアリ是ニテ其誤ヲ知ルベシ古  
今集ニ誹字ヲ用ヒタルハ貫之ガ誤カ定家ノ寫  
本ノ誤歟歌學者流ノ徒其誤ヲ掩ヒ隱サントテ  
誹ノ字ヲ用ルニ秘説アリハ雲抄ニモ俳諧誹諧  
ノ二名ヲ出サレタリト云ハ雲抄ニ二名ヲ出シ  
給シモ誤リ也俳諧歌ハ戲歌也今世ニ狂歌ト云  
ノ少モ差別ナシ誹ノ字ヲ用ヒテハ人ヲ誹謗ノ  
歌ト聞ユ俳ニテハ夕ハフレ歌也  
一今世栗田口ト名乗ル画工ハ昔ノ栗田口法眼光嚴

院御代ノ後胤ニハ非ズ元ノ種姓不知享保年中  
江戸芝ノ赤羽根ト云フ處ニ住テ浮世繪ヲ画テ  
世ヲ渡リケル者ナルガ画ノ上手ナリト故ニ召  
シ出サレテ御画工ニ成リ住吉内記廣字カ弟子ニ  
ナリテ土佐ノ風ヲ學ビタリ住吉ガ栗田口ノ家  
号ヲ授ケタリトゾ昔ノ栗田口ハ其一風アリ今  
ノ栗田口ハ土佐風也  
一住吉慶舟元ハ板谷兵各廣當元ハ青山大膳亮家人画工也  
住吉内記ガ弟子也安永ノ比内記老衰シテ画ノ  
御用ヲ辞退申上シニ依テ慶舟ヲ召出サレテ  
御醫師格ニ被仰付画ノ御用ヲ勤ム内記後ニ





て存より權の能よとてしてはちと引くも臂は志  
海り悪きまうりて右あり六權の能よとてずりて  
ち難よをふたれとつりまあやち也且ち難よハ  
昔大進物の時左ふふす物也存よふたれありハ  
ず軍よち難よふすす事あるもあき事也古き軍物  
漁乃書よ左右乃難よといふ事ハあまともち難よ  
さし左右事ハ曾く見えハ近世何流彼流乃軍者と  
いふ者古乃妄説世よ廣くはるれ武蓋乃古實也  
これゆく也彼皆が朝ハ礼家の古實ハ用らふも  
すやと云ハ礼家と云ハ近世世よ強くはるるも水滸  
トホクヤ也や彼無ある小笠原流乃事ハこの水滸ハ色く偽

依妄説とふして真の古實あるあり又彼軍者乃  
流よ武蓋ハ利方こそ肝要ふれ古實ハ用らふも  
とまり其利方と云ハ右平治世よ生れし軍者た  
みの上よ存して存く推量とゆく巧と云ハ利  
口の妄説りして實用なれず古實ハ古人ハ軍  
陣ハ用訓する武蓋と存よふら事也古實乃中よ  
利方よおのほりふらてあり也一度も戦場とふ  
てても存らふ今の軍者乃しふ事ハ信用よふ  
らす近世彼輩ハ難よふら人多し

一偽書ノ奥書ニ官本ヲ以テ寫之ト書キ或ハ名高キ  
人ノ姓名削ト書タルモアリ是其偽ヲ掩テ其書

ヲ貴クシテ人ヲシテ信ゼシメント欲スル謀計  
也愚者ハ信スヘシ賢者ハ信セズ偽書ノニニ限  
ラズ萬事上ノ威勢ヲ笠ニキテ強テ事ヲ貴クシ  
無理ニ押付ル事有リ佛神ノ名ヲ借ルモ亦同意  
ナリ

一 菽生恐在夷乃茂卿が秋風樂乃 俗語の唱歌と書さる  
物ノ序して始テ知古樂歌章皆用<sup>レ</sup>和歌考<sup>ニ</sup>之古史<sup>ニ</sup>婦  
兒輩猶善樂若<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>華夏詩聲孰爲<sup>ニ</sup>侏離鳩<sup>ニ</sup>古哉<sup>ト</sup>ソリ  
隣國と指して華夏と稱美とるハ吾國と夷狄ハ  
て賤しめしむ辭也吾國乃言<sup>レ</sup>語と指して侏離鳩舌  
と云も亦吾國と夷狄とすも也は國よ生きて世國よ

者ありしハ此國と賤ありて他の國と貴む是聖人乃道か  
らん也聖人乃道と人々教ふ身として如<sup>レ</sup>此乃辭と仕  
くハ俗ハ所謂論語らみの論語知らずめく文盲あり  
事也茂卿の書ハ世病あり茂卿の外も吾國と中  
華華夏と稱せざして他國と指して中華華夏と  
稱する儒者ハ第<sup>ニ</sup>以て<sup>テ</sup>其<sup>レ</sup>稱<sup>ニ</sup>あり皆<sup>レ</sup>の遠  
あり唐人よあり事あり

一 和國と倭國差別あり和國ハや海と此國といふ事也大  
和國を吾國の惣号也倭國と云ハ唐乃國より日本  
と指して云也云れを吾國の人ハ和國といふ處し  
吾國乃人みば<sup>レ</sup>倭國やは<sup>レ</sup>いへ<sup>レ</sup>ず儒者の口



人三今ハ穉積ト云病各  
出来タリ

ふりしと因寮密子書改て出たり車ありき又何  
人親く病氣者病は及と云願書と書くとて者病乃  
字と知すすして節用集と云く乾瓢は及と書  
とをめ此の類ハ何れ借きて一向通一が  
古書の中より行器と外居と書キ圖と孔子と書キ車  
此何事を一概ハ何れ事もせぬ事なり

- 一御鏡 延喜内匠寮式曰御鏡一面 方七寸 料熟銅大
- 四竹白鎔大一竹四兩銀大十二兩 熟炭五斗和炭
- 五斗伊豫砥青砥鐵精二分帛二尺五寸綿四兩調
- 布二尺油一合長功北二人 鑄工二人磨十 中功北
- 五人大半 工七三人小半 短功北九人小半 工北七

人小 〇是天子御鏡也

一 上ニテ 新國史曰仁和四年八月十七日於新造西  
山御願寺行先帝周忌御齋會 洲文花鳥 儀持り尼  
えり

一 太刀付護 或ハ付 銘抄曰野劔 略中 或宿老公卿高位之人  
常令持之 護

一 ムスコ ハス ムスコハ産子ノ字也高皇産靈尊ト書  
ク産ヲムスト訓スル也ムスハ産女也ウミ  
ル 男ウミ ナリ男女ヲ分ケズ産子也忌布とありてこ  
けのひすもてト云ひすも生字也生モ産モ同意  
也ムスハ蒸ノ義ニテ陽陰ノ氣ニテ蒸ニ田ヌ也

ウムト云ハ熟ノ義ニテ菓ノウ三テ自ラ落ル如  
夕月満子胎熟シテ出ル也

一牛車制料 延喜内匠式曰牛車一具屋形高三尺

四寸廣三輪料標七八枚輻料椗九十七枚槽料

椗二枚博風四枚料步板四枚檜榑五村軸木一枚

熟銅大四十斤液金小七兩水銀小八兩鐵四延漆

五升胡麻油荏油各四合掃墨二升五合帛三尺石

見綿八兩調布一端一丈二尺伊豫砥二顆青砥二

放燒土五升白綾五丈油縮五丈練絲五兩出雲席

二枚羊毛料漆苧四十兩炭十一斛和炭五十斛銀

小八兩錮銅洗草一枚木賊七兩糯米三升猪鬃二

把釭一具縮三尺絲一付四兩篋北株漆料茜大三

百斤白米九斗黃茜酢一斛二斗生縮四尺節庫

布四尺節灰四十五斛斗薪百五十荷斗完半

荷漆槽一隻長一丈已下八尺以上柴十五荷斗二

柄水麻斗篋一口受四斗水碓斗麻斗篋一口受二斗苧割斗雇

女單斗人食料白米二斗四升斗酒一斗八升斗人

合魚六升斗別鹽六合斗人別海藻三連斗人別切新錢

六十文斗二人別工百三人夫九人短論長

一桶訓 延喜式ニハ桶ノ事麻斗篋ヨムト書夕リ上

古ハ今ノ如ク竹ノ輪ヲ入タル桶ハ無ニ皆曲物

也其ワケ物麻糸ヲウニテ納ル麻斗篋田舎詞ニハ

二似タル故水筭ナド、書タル也本ハ麻糸ノ麻  
筭ヨリ出テ轉用シテ水麻筭ト云フタル也職人  
歌合ノ繪信土佐光二檜物師カワケ物ヲ作ル躰ヲ  
画タル傍ノ詞書ニゆわけりもさねハこころ大分  
ゝたりのゝあまのほろりやんとありゆわけり  
湯桶也此歌合ハ甘露寺親長卿ノ作也明應ノ比ノ  
人也其比マデモ桶ハ曲物ニテアリシ也又同繪ニ  
酒造リヲ画タルニハ今ノ桶ノ如ク竹ノ輪ヲ入  
タル桶ヲ画タリ其比ハ二品アリテ湯桶ナトハ  
古風殘リテワケ物ヲ用ヒシナルベシ竹ノ輪入  
ハ樽也

一袍、文、或説ニ袍ノ文ニ唐草輪、無輪邊ナドヲ  
用ル事延喜ノ比ハ無之ト云ヘリ延喜式ヲ見ル  
ニ縫殿寮式ニモ織部司式ニモ右ノ文ノ事見エ  
ス又天子御袍ノ文桐竹麒麟鳳凰牡丹唐草山鶴  
等ノ事モ見エス何ノ時代ヨリ是等ノ文ハ定リ  
シヤラム所見ナシカノ式ニハ見エザレ共其比  
ヨリ連綿シテ今ニ用ル歟未詳ナリ画工土佐カ  
家ニテハ管神ノ像ノ袍ノ文ニハ藻ニ花カツニ  
ヲ画クト云土佐度舟カ是又延喜式及裝束ノ諸  
抄ニ見ザル事ナリ不審年中行事ノ繪ニ藻ニ花  
文見エズ

井上通興  
伊呂波  
漢ノリ

一三韓職名 日本紀二三韓ノ職名所々二見工夕  
レトモ其次第不詳仍井上通興力著之夕ル三韓  
紀畧ノ文ヲ此ニ抄出ス曰有土斯有民有民斯有  
長有長斯有官故不唯漢地有官爵杖祿之制夷蠻  
戎狄亦皆有号所以沮渠右賢著於漢史達魯花赤  
聞於无氏今舉三韓職名之大較以見其貴賤為職  
品畧●漢洪武八年新羅設官有十七等一曰伊伐  
食二曰伊尺食三曰匝食四曰玻璃食五曰大阿食  
皆壤真首莫骨王族也六曰阿殄自重阿殄至四重阿殄七曰  
一言阿殄八曰沙殄九曰級代殄十曰大奈麻自重  
大奈麻至九重奈麻十一曰奈麻自重奈麻至衍

七重奈麻十二曰大舍十三曰舍知十四曰吉上十  
五曰大鳥十六曰小鳥十七曰造佐●魏景初元年  
百濟設宮有十六品一品内臣佐平掌宣納事内頭  
佐平掌庫藏事内法佐平掌礼義事衛士佐平掌宿  
衛兵事朝廷佐平掌刑獄事兵官佐平掌外平馬事  
二品達率三品思率四品德率五品行率六品奈率  
以上服紫以銀華飾冠七品將德八品德九品固德  
十品李德十一品對德以上服緋十二品文督十三  
品武督十四品佐軍十五品振武十六品克虞以上  
服青●高句麗官凡十二級見唐書本傳作高麗一  
曰大對盧或曰吐捺二曰鬱折主圖簿三曰大夫使

者四曰帛衣頭大兄帛衣者先人也乘國政三歲一  
易善職則否凡代日有不股則相攻王為閉宮守勝  
者聽為之五日大使者六日大兄七日上佐使者八  
日諸兄九日小使者十日過節十一日先人十二日  
右鄒大加

一函簿 或書 志書曰行幸ト同之古事記ニ三ニキ  
ト訓ス三輔黃圖云車駕法從次第謂之函簿句會  
云從天子駕曰法從事物紀原云天子出行甲楯右  
外餘兵右內故曰函簿云云今按ニ白會ニ函ハ大  
者簿ハ矢室也トアリ外者ヲ用内ニ矢ヲ用テ不  
虞ニ備ヘ警護スル也

一公帖 同書云五山臨濟ノ僧官位ニ昇ル時公方  
家ノ許狀也首座以上ニ授ケラレ是亦室町家ヨ  
リ始レリ

一御下文 同書云公方家ヨリ御家人ニ彩地ヲ宛  
行ル、時又ハ成敗ナトノ義ニ付テ賜ハル所ノ  
判物也發端ニ下ノ一字アリ中央ノ傍ニ公方家  
ノ御印ヲ押シ下ニ件ノ家人ノ官氏實名ヲ載セ  
其次ニ要用ノ旨趣ヲ書テ終ニ年月日ヲ記シ  
クル也當時斷絶云云 貞丈曰下文ノ文蘇東鑑  
所々ニ在リ

一悲悅 庭訓往來七月卅日ノ狀ニ被引導奉行所



者<sup>ハ</sup>恐慌作云云是と見れそ恐慌と云何近年云と  
しつるありあつて

一 一筆 書簡乃数端より一筆破とて書車細川玄吉  
法平の書札抄云い<sup>一筆破といふは</sup>一筆破とて書すは一筆よりて  
用の相調るといふ也<sup>一筆破といふは</sup>一筆破とて書すは一筆よりて  
一筆とて徳車ハ云々<sup>一筆破といふは</sup>一筆破とて書すは一筆よりて  
貞丈云<sup>一筆破といふは</sup>一筆破とて書すは一筆よりて  
古歌云くけふ見ずいふ<sup>一筆破といふは</sup>一筆破とて書すは一筆よりて  
しつるありあつて<sup>一筆破といふは</sup>一筆破とて書すは一筆よりて  
古歌一首斗と一ふて書く送るゆへ<sup>一筆破といふは</sup>一筆破とて書すは一筆よりて  
多也一筆とて書く<sup>一筆破といふは</sup>一筆破とて書すは一筆よりて

裏じきま<sup>一筆破といふは</sup>一筆破とて書すは一筆よりて  
又一ひら二<sup>一筆破といふは</sup>一筆破とて書すは一筆よりて  
端より一筆と書く<sup>一筆破といふは</sup>一筆破とて書すは一筆よりて  
の風俗<sup>一筆破といふは</sup>一筆破とて書すは一筆よりて  
て物事<sup>一筆破といふは</sup>一筆破とて書すは一筆よりて  
也<sup>一筆破といふは</sup>一筆破とて書すは一筆よりて  
こ<sup>一筆破といふは</sup>一筆破とて書すは一筆よりて

一文書之端作覚字 當世ハ文書乃端仍覚のまよ  
一字書く<sup>一筆破といふは</sup>一筆破とて書すは一筆よりて  
い<sup>一筆破といふは</sup>一筆破とて書すは一筆よりて  
どの代<sup>一筆破といふは</sup>一筆破とて書すは一筆よりて

家より移りし事也其の事は移りし類にてもあり  
し高人の心乃其の事移りし事あり

一拾遺書 或人の云古實と云く古乃事を知りて何  
ありせん今世の事と云く知るべしと云つり是も

一聖明り今世乃事也 聖中 聖中の法法あり  
諸國乃地理風俗土產等の事も亦も知るは古乃事

也今と知り古と知るは古今通達乃学者也古實の  
事も今と知る事と知るべしと云く古實と云

らざるは事の移りし事也其の事も亦も知るは古乃事  
べし今と知る事と知るべしと云く古實と云

多し事の移りし事也其の事も亦も知るは古乃事  
古書に記す事を知るべし古實を用ふ事も亦も知るは古乃事

事の移りし事也其の事も亦も知るは古乃事  
りけぬる事也其の事も亦も知るは古乃事

たりしが事乃酒の事也其の事も亦も知るは古乃事  
ふるが如し酒の事也其の事も亦も知るは古乃事

一神代 神君ハ國常立尊ヨリ神武天皇ニ至ル迄  
ニ幾百代ヲ歴タルモ知ルベカラズ神代ニハ文

字ナシ其代々ニ記録ナケレバ唯言語ヲ以テ云  
傳タルナレバ代数モ神ノ名モ忘レタル事多カ

ルベシ應神天皇御代文字渡り來テ後學文始リ  
書籍ヲ紀ス位ニ成リ神代人事ヲモ聞傳ヘシ趣

ヲ書ク時ニ至テハ神代ヲ去ル事跡遠シ其レマ  
デノ間ニハ昔ノ諸傳ヘ聞傳モ漸々ニ忘レ來テ  
神君ノ名唯十二代ノミヲ忘ズシテ云傳ハタル  
ヲ記シ留メシナルベシ其十二代ヲ後代天神七  
代地神五代ト云フ此七代五代ハ忘レザル念ナ  
ルベシ此外忘レタル念ハ幾百千代有リシモ知  
レサル也後ニ唐ノ書傳トモ渡リ來テ後彼土ノ  
年代ト此方ノ年代トヲ推シ合テ見レバ年數ハ  
相同シテ此方ノ神君ノ代數ハ纔ニ十二代ナル  
故一神ノ年齢ヲ幾万千百歳ト後ニ配リ當タル  
也幾億万千百年ノ間ニ纔十二代ハ甚少シ是其

神名。代數ヲ忘レテ云傳ヘザルナルベシ神代ハ  
天神七代地神五代ヨリ外ニハナシト思フハ小  
見ナリ神君ノ名。代數父ニモ右ノ如シ況ンヤ神  
代ノ事跡ヲヤ其說正躰ナキ奇怪ノ事諸說區々  
ニテ何レヲ正ト定メカタキガ故ニ舍人親王日  
本紀ニ一書曰ト云テ諸說ヲ上ゲタマヒシ也去  
レバ神代ノ事ハ其書ノ文ノマ、ニ見テ樓ニ亭、  
強附會ノ穿鑿ナル妄說ヲ作テ説ク事勿レ今世  
神代卷ヲ解説スル者ハ神代卷ヲ寓言譬喻隱語  
ノ書トナシテ牽強附會ノ妄說ヲ作りテ謎ヲ解  
ガ如クシテ秘傳口訣トス取ルニ足ラズ  
猶予ガ著ス所

ノ神代卷獨見ト云書  
ニ委ク記スユハ畧之

一熟線綾 延喜織部式云熟線綾一疋 長四丈 廣二尺 料絲

六介二分織手一人共造二人。壺井義知説ニ熟

線綾ハ縮線綾也縮熟同音也ト云フ 貞丈按此

説ハ下文ニ浮物一疋トアルニ對シテ熟ヲ縮ト

云フナルヘシ 和名抄云綾有熟線綾長連綾。 二疋綾花文綾平綾等名

一浮物 同式 右ノ次 浮物一疋 長四丈 廣二尺 料絲六介二

分織手一人共造二人

一稻荷杉 或同云又亦妙光後羽長歌まきこしぎ

也今日初牛乳あましときいりの根乃也山梨

も列しといふ心をめり 貞丈嘗河川次房百首編

新指顯件 いふ山をいふ乃杉とまつこまその

も編く人のうぶはるふかとりありいふう山指

る人根の葉とりてかざしますゆへり枝とりり

あらふれんふ乃方の葉なくあら也かざしとい葉

とあて頭よふす也稻荷山のあらしは根古新よ

こら多し

一七骨扇 河川次房百首扇忠房 寸急ひろく七

のやいのくらあらきやいましけりあらし乃婆と

口是蝙蝠扇乃車也寸急扇七つ也七つのよ

てらりし乃扇のと初といふ乃婆乃やいのもいり

ぬとらん也七つといふ乃婆といふ乃婆といふ乃婆

かしていひ無けども也

一イカノボリ 涼ノ詞也江戸ニテタコト云古代

ハ。モラウシト云和名抄雜藝具曰紙老鷄辨色立

成云紙老鷄世間云以紙為鷄形乘風能飛一云紙

鷄マシ○古ハ鷄ノ形ヲ作りタリ後代サマクノ形ヲ

作ル下ニ長キ足ヲ付タル躰鳥賊ニモタコ鰯魚ニモ

似タレハイカノボリトモタコトモ云フナリ江戸

ニテハ春弄フ相模ニテハ五月

弄ノ之所々ノ風ニヨルヘシ

一ヒコ 俗ニ孫ノ子ヲヒコト云フハ誤リ也孫ヲ

ムマコトモヒコ共云孫ノ子ヲハヒコト云也和名抄ニ爾雅云子ノ子為孫

○曾孫爾雅云孫ノ子ヲ為曾孫和名抄トアリ

一汗衫 堀川次郎百首ニ五節兼昌 ぬらん乃あ

そふちちう那とあふかかみけすえ乃なきよ

ふそくトアリ非ナリ

又その字あふごも悪汗衫乃字割音と持てかきと

と云あねだみちちんじ

一菊のまをせり 同書九月九日忠房 いくえともあ

さあさくといえやるの綿あまあがしそつ綱ハ

一住吉廣當談テ云紀貫之五位ナレドモ後小松院

勅アリテ土佐守行廣ニ命シテ四位ノ装束ニ画

シメラレシ故今ハ其定ニテ画ク知ラヌ人ハ難

ズル事ナリト又云人麻呂ト貫文ノ裝束ハ定法  
ニアラズ一流ノ習アリト 貫文ハ四位ノ黒袍ナ  
リ人磨ハ白直衣ナリ

一紫式部善悪 湯氏物語ト書クハ善ノ好色狐

ありて佛道ヲ入リしめんが為也是凡人乃才学ありて  
に親世色の化身ありかぬ也との物語乃抄物ども  
ありて平康頼ガ寶物集より紫式部とて  
と云く湯氏物語ト書クハ地獄ありて苦  
獄ありて湯氏と煖とて一日使とて  
らふべしと人の善より悪けるあり親世色の化身  
也といふ地獄ありて善悪黑白乃女一如此

の伝説人なりて善より悪なる事也親世色の化身なりて  
地獄ありて善より悪けるありて善悪也善より親  
音ありて地獄ありて善より悪けるありて善悪也地獄ありて  
らむ親世色ありて善より悪けるありて善悪也男子  
をけぬありて善より悪けるありて善悪也地獄ありて  
乃間ノ極楽と云地獄といふありて善より悪けるありて  
一海ありて善より悪けるありて

一史記封禪書曰後九年文公獲若石云于陳倉北阪  
城祠之索隱曰云語詞也○此云字ノ置處常ナラ  
ス用字如此者亦有之

一大集經曰妻子珍寶及王位。臨命終時不隨者唯戒



信一々道士乃為子能うれたり我國より道術を  
ず唯靈府乃祭と行ふ者稀なり神道家のくは  
者も真言家もく行ふ者あり右其道乃事なり  
太乙神武皇帝と云わとあるを画像乱髪垂髻にして  
白衣也其上より北辰又乾卦と画をそのりよ玄武  
傍ニ鬼捧劍乃形也彼太乙ハ昂ナ北辰也と云我國ニ  
ハ唯い來のこしをくみく道家の伝説よりいふ  
事善し浮屠氏乃妄言あり上ヨ道家の妄言と流く  
謬ヲ行ふれん天正此人民惑わ者甚多なり後代に至  
くハ是もいふれん彼世人漸々愚昧なり知念  
長より隨之冥福と求め懐偉と好めむ也

一予が歌 秋今りもはさひくさるる  
りし春のゆわき けさひくさるる時を景とみさる  
人を予が心ほども感をもじ古詩も古歌も此  
を深きしあり人は秋と云く云ハあけはの秋ハあ  
くまといふらあ方の夕暮ハらぬ事也といふれ  
ハ人のあふらひらくもわらん我ハ人のあふら  
いひくさる事といふぬ事やハあはさ

一予索詩才ヲ生レ得ザレバ詩作ル事ナラズ故ニ  
詩ノ事ハ知ラズ然レドモ間ケル言ヲ此ニ記ス  
詩ハ唯讀ム物ニハ非ズ唐音ヲ以テフニ付テ  
謠フ物也韻字平仄ハ即チフニ也別ニフニ付テ



スル事ナレ吾國當時ノ人唐音ヲ知ラズレテ作  
ル故句ハ巧ナレトモ唐音ニテ謠フ時ニフエ滯  
リテ謠ハレ又詩アリフエ滯ルト云フハ上聲去  
聲入聲ノ三ヲ統テ仄音ト号シテ仄字ヲ置クベ  
キ所ニハ漫ニ上去入ノ三聲ヲ心マカセニ置ク  
故入聲ノ字ヲ惡ク置ケバウタフ時フエノウツ  
リツマリテ不相子ニナリテ謠ハレ又也上去ノ  
二聲モ上聲ノ字ヲ置タルヨリモ去聲ノ字ニテ  
フシノウツリヨキモアリ去聲ノ字ヲ置タルヨ  
リモ上聲ニテフシノウツリヨキモアリ又上去  
ノ二聲何レニテモ妨ナキアリ此フシノウツリ

ノ所ハ唐音ニテ謠テ試ザレハ善惡ハ知レザル  
也唯韻字平仄ヲ知テ巧ニ文字ヲ連子タルバカ  
リガ詩ニハ非ズ文字ハ巧ナラズトモフシノ滯  
リナク謠フニ障ナキヲ詩ト云ベレトハ或人ノ  
談リキ

一 和歌も唯のらゝ物々をあらはせしめて  
しゝる也今も禁裏の侍舎娘の口讀作ドクシ。講師カウシ。發  
声といふ役ありて讀作ドクシ。懐紙の歌どもとてみゆげ  
て叔教ウヂノシ。音韻ととりてうゝい出イデ。ひよつまヒヨツマと講作  
もろゝも也是と披講といふとをさうさふふしハ  
ちい車チイクルマ。やく秘事ヒシ。あまを地下チカ。うそハ知ぬ事チカニシ。あま

吾國の昔も唐乃如く秘事といふ事ありしが後  
代より如くハ禁裏方の事なり公家家の家藏事  
りも秘事やいふ事出づるまじしかくさるる日  
本よ居ながら陸國の事ハ何れも強手知りし事  
學者ハ多けきとも是れも日本乃事ハ知ぬ事多  
し秘事といふかゝる事ハ漸く日本乃事ハ  
佐々木知まぬやいふ事也何れも秘事せむて唐  
く日本國中の人ハ知を隔りて唐の國中ても傳へて  
日月とたふ他もいふ事也すなはち事ありといふ  
くさりし風俗實にけむる事也けらりし風俗  
いふは上古の如く貴方人乃官人と進退せしめ日本六

十六列及三韓蝦夷等と公家より治事ハあり  
り守りとして上と下ハ人衆也いふ事ハ守り我  
神皇乃朝廷の表とらと難むあり  
一詩歌管絃乃遊と王道といふ人あり誤也王道  
と云ハ仁政と民を施して天下の万民と安樂を撫  
養ふ事也万民安樂にして天下泰平ありとの  
て詩歌管絃乃遊ハ事也詩歌管絃と王道といふ  
ゆらりと遊事といふ事也橋者日といふ語し  
朝政月といふ語いふ事也天下ハ桓桓の學握  
入り

一十幹十二支ノ名神代ヨリ應神天皇ノ御代王仁

世説傳レリ  
長短の目景ノ  
長短ナリ

が來朝以前マデハ知ラスシテ在リシナルベシ  
彼御代十六年ニ王仁が來テ其年百濟國ニ已ノ  
年ナルヲ以テ日本モ乙巳ノ年ナルヲ始テ知  
テ夫ヨリ年々ノ幹支ヲ知テ又逆ニ推シテ神代  
ノ幹支ヲ知ルナルヘシ神代元ヨリ幹支ノ名有  
テ百濟ノ幹支ト符合シタルニハアルベカラズ  
一 延喜式 類聚雜要抄ナドニ長功短功中功ト云  
事アリ延喜織部式雜織ノ条ニ冠羅一疋長四丈廣二尺  
大料絲五疋十兩織手一人共造一人長功日一尺  
一寸無文ハ中功日九寸無文ハ短功日七寸無文ハ  
十見エタリ是ヲ以テ推シ考ルニ工匠ノ者ヲ三

等ニ分テ手ハヤクシテ物ヲ人ヨリモ多ク作ル  
ヲ長功トシ手オソクシテ人ヨリ物ヲ少ク作ル  
ヲ短功トシ長短ノ間ノ者ヲ中功ト云フナルベ  
シ右冠羅ヲ織ルニ一日ノ寸尺ヲ以テ考フヘシ  
共造ト云フハ  
テツタイナリ

一 俗語 男子ノマヘガ三前刺る車トゼンハツとい  
ひ髻礼のイヒイレ言トユイナフ結糸用といひ  
旅の友と云ふといひ出立ノ山車のイ  
三アケ忌明忌の車トキメイといひ中裏中モトモウチウ  
中勝といひ墓詣トビヤウサ参トソノ類近年者  
と云ふ詞也と云ふト又俗男が互の於トキナ



佛法内リイハ  
 我邦古代  
 ヲリノ道ノ神道  
 トイヒン也今ノ  
 世ノ神道ニハ  
 上ノ治道人  
 通リ神道ト云  
 也

見エタル故後代ニ云フ所ノ神道ノ様ニ聞ユレ共  
 サニハアラス巫祝ノ口實トスベキ文也紛レ易  
 キ文ナリ能辨フベレ後代ニ神道ト云フハ神ノ  
 教ノ道ヲ云フ也是ハ後代人ノ人ノ偽作也紀ニ所  
 謂ノ神道ハ彼偽作ノ神道ノ事ヲ云フニハ非ス  
 今世ノ眼ヲ以テ古代ノ事ヲ見レハ見ソコナフ  
 事アリ別ニ一清眼ヲ開テ觀ヨ

一 摺字 玉篇曰カ合之涉ニ切敗也折也トアリカ  
 合切音ラフ之涉切音セフ也訓ハヤブル凡クジク  
 凡ヨム也スルト云フ訓ハナレイカナル事カ中  
 古以來吾國ニテ磨ルノ義ニ摺ノ字ヲ用ヒ來レ

延喜式  
 殿式云吉  
 摺布紗ト  
 アリ摺ヲ誤  
 テ今摺ヲ用

リ摺扇扇也摺屏風ナリ屏摺冊ナリ本此等ノ摺ノ  
 字ハ折ルノ義也磨ルノ義ニテハ通ゼス又摺字タ  
 ヲム 追按スルニ摺ノ字ヲ用ルハ摺ノ字ノト  
 リチガヘナルベシ延喜式彈正式雜摺色又摺染  
 成文云云摺字スルトヨムナリ  
 一 認字 玉篇曰而振而證ニ切識認也字彙曰而震  
 切識物トアリ而振切音レニ而震切モ同レ而證  
 切音ジヤウ也識認モ識物モシルス也記ノ字ノ  
 意也又シルシ也符字意也物ノ目シルシ也認旗  
 ト云フハ目シルシノ旗也俗ニシタムルトヨ  
 ミテ書ク事ヲ認ト云モ記スノ。。。義也又俗

語ニ物ヲ調ル事ヲトリシタムルト云テ取認ト  
書クハ義通ゼス飯ヲ食フ事ヲシタメヲスル  
ト云フモ義通ゼス

一 役<sub>レ</sub>役<sub>ハ</sub>字 役ハ正字也役ハ俗字也二字共義同  
六書正譌云从<sub>二</sub>人<sub>一</sub>荷<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>役<sub>ニ</sub>之意也俗作<sub>レ</sub>役<sub>非</sub>然今  
惟<sub>レ</sub>从<sub>レ</sub>人<sub>而</sub>不<sub>レ</sub>从<sub>レ</sub>人<sub>矣</sub>

一 乍<sub>レ</sub>字 小神韻會曰助駕切蒼頡篇乍<sub>ハ</sub>兩辭也トア  
リ和訓ナガラトヨム彼是兩事ヲ兼帶シタル詞也

一 乃<sub>レ</sub>字 イマシ<sub>レ</sub>凡<sub>ス</sub>ナハ<sub>チ</sub>凡<sub>ク</sub>ヨムナ<sub>ニ</sub>テ共<sub>ク</sub>ヨム日本  
紀ノ訓ニ汝ノ字ヲイコシトヨム然レハイコシ  
ト云フハナニテノ古語也儒書ノ訓點ニスナハ

テトヨムベキ助語ニイコシト訓ヲ付タルアリ  
誤也スナハチトヨムベシ又儒書ニ無乃ノ二字  
ムシロト訓ヲ付タリ無乃ノハ玉篇ニ奴改切  
説文曳離<sub>ニ</sub>之難也トアリ曳<sub>キ</sub>離<sub>レ</sub>ントスルニ離  
レガタクヒキシラフ詞也無乃ト云フハ則チ曳  
シラフ事ナク離レ去ル意也今世ノ俗語ニテイ  
ハズ。ナンノカノト云ハズニサツパリト。云フ  
意ナリ

一 へ<sub>レ</sub>字 片カナニモイロハニモアリ邊<sub>ニ</sub>字ノ文ヲ  
省<sub>キ</sub>タル也凡<sub>ク</sub>云又ノ<sub>一</sub>ノ字也凡<sub>ク</sub>云又<sub>ハ</sub>字也凡<sub>ク</sub>云  
諸説區々也又<sub>ハ</sub>字<sub>別</sub>ノ古字乃省タル也ト云説モ  
字也

山本義俊撰  
へノ字、解後院  
記、所ニ異ト貞文  
ヲ蓋シ改ル所アルカ  
思フニ此書ハソノ稿  
本アルベシ

アリ何レ氏漢字ノ省文トスルハ非ナルヘシ予  
カ考ニハ是ハ上古吾國ノ諺文ナルヘシヤ<sup>三</sup>也<sup>サ</sup>  
禾<sup>ツ</sup>不<sup>ニ</sup>尔<sup>ノ</sup>乃<sup>ホ</sup>子<sup>セ</sup>也<sup>ツ</sup>川ノ類ト一属ナルヘシ小野道風  
ガ真蹟ニハへノ字へ如此書ケリ  
一 神道ニ様々アリ 兩部習合神道 社例傳記<sup>神</sup>道  
元本宗源神道 唯一神道等也是皆様々ニ道理  
ヲ付テムツカレクコシラヘタル者ニテ後代人  
作爲也此外ニ 天社神道ト云アリ是ハ土御門  
家<sup>安</sup>傍<sup>兵</sup>陰陽道ノ神道也此神ハ陰陽家ニ祭ル神  
ナルベシ天一神金神蘇民將來秦山府君ノ類ナ  
ルベシ

一 煉草ヲ製スル方牛ノ草ヲ煉也長門牛ヲ最トス  
膠<sup>ニ</sup>ヲ<sup>六</sup>薄ク煎シテ冷シテ其膠水ニ牛草ヲ浸シテ  
心マテ水ノ透リタル時取り揚ケテ堅木ノ盤ノ  
上ニノへ敷テ鉄ノ槌ニテムラナクホツ也ホテ  
ハ薄クナル也三日ノ間打テ後表裏ニ石灰ヲ一  
グシヲスリツケ日ニ乾ス也是ヲ以テ鑑ノ札<sup>サ</sup>ヲ  
作り又煉鐔ニスル也草ヲ厚クスルニハ草二枚  
或ハ三枚重子テホテハ一ツニ付<sup>キ</sup>テ厚クナルナ  
リホ盤ハ堅木也切ク子ノ方ニ草ヲ置テホツ也  
右鑑工岩井某ガ傳也○貞文按煉草冬月寒中ニ  
製セバ草ノ性強クシテ虫ノ生ズル事アルマジ

キ也夏月ノ製ハイマダ乾サル時草腐ル工へ性  
弱クシテ虫生ズル事アルヘシ又按草乾タル時  
泥鱧ノ肉ヲスリ付テ乾スベシ或ハ泥鱧ヲ焼テ  
其煙ニテフスベタルカヨシスヘテ軍器ハ如此  
スベシ虫ヲ生ズル事ナシ

一地震神 日本紀ニ推古天皇七年夏四月乙未朔  
辛酉地動テ舍屋悉破則令四方俾祭地震神○何  
ト云フ神ト云フ事ハ知レズ唯地震ノ神ト云テ  
祭リタルナルベシ

一木綿 類聚國史ニ桓武天皇延暦十八年崑人木  
綿種持來リシヲ十九年諸國ニ植サセラレシ由

延喜内藏云  
木綿下付

見エタリ後代絶タリ夫木集ニ衣笠内大臣建長  
人歌ニシキシマヤ大和ニハアラヌカラ人ノウ  
エテシ綿ノ女子ハ絶ニキト見エタリ其後年月  
ハ知ラサレ共再タビ渡タル歟玄惠法印建武ノ  
庭訓往來ノ狀十月ニ襖單衫之箱花繡木綿等各一比ノ人配  
ト見タリ夫ヨリ打ツ、キテ在ル歟榑村市島右  
衛門尉長高天文永祿室町殿日記ニ天文九年  
ノ狀ノ文言ニ中間衆ノ木綿三十五疋買取トア  
リ貝原茂十帛好古ガ和事始ニ文祿年中ニ再々  
ヒ渡ル由見エタレトモ庭訓ニ見エタレバ夫ヨ  
リ前カラ有レ也類聚國史ニ見タレハ木綿ニテ



庭訓以下ニ見タルハ今用ル所ノ草綿歟未詳

一 遜位ノ帝稱院 神皇正統紀卷五白川院記昔ハ退

カノ君ハ弟薩子あります是レ後院ト云冷然院トも

ふいくまうた而もままあらず白河より後もも

多く抄後よりありて上皇の法院乃ち和名といふ事あり

りり云云 貞丈云弟薩院も冷然院後ニ冷泉も

法院ノ名也此二ツノ法院といふレ後院と云也右ニ

ノ後院乃中の抄ありといふ事あり故院と云事あり

也後院乃事拾抄ありといふ事あり佛法の院号の故と

わらず

一 蠟燭 職員令主殿寮日頭一人掌中燈燭松柴燎ヲ

義解日謂油火ヲ為燈蠟火ヲ為燭ト見夕リ令ハ元大四

寶元年ニ定ラレ養老年中更刑定セラル義解ハ

天長三年ニ撰ル右ノ文ニ據レハ其比既ニ蠟燭

在リレ也和名抄云蠟燭唐式云少府監毎年供蠟

燭七十楮トアリテ和名ハ無シ和名抄ノ撰者源

順ハ天曆ノ比ノ人也其比蠟燭專在ルヘシ和名

ヲ記ザルハ和名無キ故ナルヘシ和名無キ事ハ

吾國ニテハ作ラズシテ唐ヨリ渡リ來ルヲ用ヒ

ラレシナルヘシ本外國ノ物ナル故禁中ニテハ

不用之油火ヲ用工燈臺ヲ用テ燭臺ハ不用之

一 皇代數 俗ニ皇代ヲ數フルニ神功皇后ヲ十五

代トスルハ誤也神功皇后ハ帝位ニ歸キタマハ  
ス故ニ皇代ニ入ラズ古事記ニハ皇后ノ事ハ仲  
哀天皇ノ紀ノ中ニ載テ別ニ紀ヲ立ズ日本紀ニ  
ハ皇后ノ紀ヲ別ニ立ラレシ故後人思ヒ誤テ代  
數ニ入レテ十五代トシタル也舊事紀ハ偽書ナ  
レバ云フニ足ラス

一神書 正シキ神書ハ 古事記 日本紀 古語  
拾遺此三篇ヨリ外ニハ無之 舊事紀ハ古キ偽  
書也聖徳太子蘇我馬子が名ヲ借リテ偽作シタ  
ル者也偽作ノ明證多シ其外伊勢十二部ノ書ヨ  
リ以下數篇皆末書ニテ佛語佛理交リテ清爽ナ

ラス或ハ儒教ヲ神語ニ偽リ作りタルモアリ山  
崎汎ノ書ニ多クアリ佛ヲ交エタルハ呵ル人多  
シ儒ヲ交エタルハ呵ル人ナシ何ソ私スルヤ  
一本尊 佛道ニハ阿弥陀ヲ本尊トス道家ニハ太  
乙真君ヲ本尊トス神道ニハ天照大神ヲ本尊ト  
ス儒道ニハ天ヲ本尊トス上帝ト稱シ天帝ト稱  
ス何レノ道ニモ本尊ト云フ者ナケレバ車ニ轆  
無キが如シ道ハ元人作也作ニ巧拙アリ  
一書名冠本朝二字 書籍ノ題名ニ本朝ノ二字ヲ  
冠ラシメタル者多シ本朝ト云フハ偽朝ニ對ス  
ル稱也吾國ニテ壽永ノ比元弘建武ノ比兩人ノ

天子在リシ時ニハ相互ニ僞朝本朝ト稱シタリ  
キ夫ヨリ前後ニ僞朝ナケレハ本朝ト稱スベキ  
事ナシ唯外夷ノ國ニ對シテ本朝ト稱スルノ云  
也西土ノ書ニ列女傳アリ列仙傳アリ文選アリ  
蒙求アリ故ニ彼書ニ擬シテ編タルヲ本朝列女  
傳本朝列仙傳本朝文選本朝蒙求ト号シタルハ  
異朝ニ對シテ云フナレハ是ハ理也異朝ニ軍器  
考ト云書ナキニ本朝軍器考ト号シ異朝ニ佳節  
錄ト云フ書無キニ本朝佳節錄ト号スルガ如キ  
ハ理ニ叶ハズ西土ニ爾雅アル故和爾雅ト号シ  
西土ニ荆楚歲時記アル故日本歲時記ト号スル

ハ理ニ當レリ西土異朝ニ對スル義ナクシテ本  
朝日本和等ノ字ヲ漫ニ書名ニ冠シタルハ誤リ  
也凡儒者ノ癖ニテ身ハ日本ニ在ナガラ心ハ西  
土ノ人ニ成リテ日本ヲ外夷ニ見ルヨリシテ其  
心外ニ見ハル、事アリ誤レリト謂ツヘシ  
一官朝稱 近年儒士ノ著セル文ニ今ノ將軍家ヲ  
指シテ謂フニ官ノ字ヲ用ヒ朝ノ字ヲ用ルハ誤  
也官モ朝モ天子ノ事也賴朝以來日本國ヲハ武  
家ニ奪ヒ取リタレトモ皇位ヲハ奪ヒ取ラズ天  
子ヲ立テ置テ君臣ノ礼ハ亂レズシテ在レハ天  
子ヲ指シテ官ト云ヒ朝ト云フ事ハ上古ノ如ク

稱ジテ變改スル事有ヘカラス天子ノ稱ヲ以テ  
將軍家ニ稱スルハ非礼也將軍家豈非礼ヲ悦ビ  
給ハンヤ儒士トシテ礼ヲ知ラズハ誰カ礼ヲ知  
ランヤ今世トテモ天子ノ出行ヲ行幸ト云ヒ將  
軍ノ出行ヲハ御成ト云フ天子ノ言ヲ勅宣ト云  
將軍ノ言ヲ上意ト云フ混雜スベカラザル事ヲ  
知ルヘシ君ヲ弑シテ帝位ヲ奪ヒ取ル外國ノ文  
章ト同風ニ書ハ誤リ也或説ニ上意御成其外御  
老中御側衆ナド類ノ役名ハ俗語ニテ漢文ニハ  
書レズト云ヘリ是亦誤リ也上意御成ノ類ハ足  
利將軍ノ時ヨリ天下ノ通法ノ稱也俗語也ト云

テ通法ヲ敗ル事有ルベカラズ御老中御側衆等  
ノ役名モ今天下ノ通稱也武家ニテハ官職ト云  
ハズシテ役ト云フ是亦天子ト差別ヲナセル稱  
也今ノ役名ハ俗也トテ私ニ唐メキタル官名ヲ  
作テ書クハ將軍家ヲ賤ズル也如此ノ事唯當時  
ノ正稱ヲ用ベキ也唐ノ代ノ人當時ノ官名ハ俗  
也トテ漢ノ代ノ官号ヲ用タル例モナク元ノ代  
ノ人當時ノ官号ハ胡俗ノ稱也トテ別ニ私ニ官  
号ヲ作テ文章ニ用ヒタル例ナシ右ニ所謂ノ或  
説ノ如キ人ノ文章ハ當世一場ノ弄翫ニ備ル戲  
文ニハサモアルベシ百代ノ後ニ遺スベキ文章

トスルニハ足ラス

一 藪醫 庭訓往來 十一月十日 錐相尋醫骨文仁 上 藪

藥師等者 間見 来リ 和氣丹波之典藥曾 ラ 以難逢

トアリ藪藥師ハ今世ニ云 やぶ 醫者也下 ノ 醫

者ノ事ト藪醫者ト云藪ノ字ニ付テ様々乃迄

リ何處モ迂遠也 貞丈倭やふト云ハ野 ヤ 夫 ブ 夫 ブ

べー藪ノ字ハ細ニ付テ例のあて字 あり 下

醫者ハ大家 あり 振 う 事 の 常 に 唯 曰 野人

乃病ト療 ま 乃 の 故 に 野 ノ 夫 ノ 醫者ト い あり し

一 隼人習吠 日本紀ニ隼人犬ノ吠ルマ子スル事

見エタリ延喜隼人式ニ凡 今 來 集 人 令 大 衣 習 吠

左 發 本 聲 右 發 末 聲 惣 テ 大 聲 十 遍 小 聲 一 遍 訖 テ 一 人

更 發 細 聲 二 遍 大 衣 ト 云 ハ 隼 人 ノ 内 ニ 大 衣 ト 云 者 アリ

大 隅 ヲ 爲 左 道 隼 人 ヲ 催 促 雜 物 候 時 令

聲 三 節 蕃 客 ハ 朝 限 不 在 吹 限 ニ 又 曰 今 來 隼 人 發 吠

一 當色 右ノ文三聲ノ下ニ云其官人著當色横刀

大衣及番上隼人著當色横刀白赤木綿耳形鬘 自

餘隼人皆著大横布衫 襟 袖 著 布袴 著 兩 面 緋 帛 肩 巾

横刀白赤木綿耳形鬘 横 刀 上 隼 人 己 上 執 楯 槍 並 坐

胡床

一 肩巾 右ニ見夕リ肩巾 或 用 銀 巾 婦 人 ニ 限 ラ ス

隼人毛服 之

一五百歳而聖人出 史記評林讀史總評曰周公五  
百歳而有孔子孔子五百歳而在斯乎○負丈曰年  
限不足信之孔子没而後至于後漢光武皇帝建武  
元年凡五百三年有何聖人俗説ニ聖人ハ五百  
歳ヲ歴シハ出ルト云ニヨリテ  
一東字訓 日本紀景行天皇紀ニ二十八年冬十月  
壬子朔癸丑日本武尊東ノ夷ヲ征ニカ爲ニ發路  
夕マフ上總ニ至リ夕マフニ海中暴風起テ御船  
漂蕩テ渡ラレズ笏橋姫カク御船ノ没マントス  
ルハ是必海神ノ心ナラン願クハ妾ヤツが身ヲ以テ  
王ノ命ヲ贖ハント云テ海ニ投入夕マフハ風止  
テ船岸ニ着ヌヲ得夕リカクテ後武藏上野ヲ歴

テ西ノ方碓日坂越ノニ至リ玉ヒ碓日嶺ニ登リ  
テ東南ノ方ヲ望ミ見テ笏橋姫ノ事ヲ思シメシ  
出テ三夕ビ歎キテ吾孀者耶ト宣ヒシ故ニ因テ  
山東ノ諸國ヲ吾孀國ト云フ由見エ夕リ然レバ  
古書ニ東國トアルニ景行天皇二十七年マデノ  
事ヲ記シタルニハ東字ニ。アツマト訓ヲ付ベカ  
ラズヒガシトヨムベシニ十八年ヨリ以後ノ事  
ヲ記シタルニハアツマト訓ヲ付タルモ妨ナシ  
神武天皇ノ東征ヲアツマウチ夕マフト訓ヲ付  
タル書モアルニ依テ此事ヲ記シ置ク也  
一兒名 古事記垂仁天皇紀曰凡勅詔子名母必名ツ

云云上古ハ産ル兒ノ名ハ母必名付ル事吾國ノ  
風俗ニテアリシ也今ハ父又ハ伯叔父外戚ノ名  
付ル事ニ成レリ

一平維章金吾和學辨云日本紀ハ舍人親王太朝  
臣安麻呂紀清人三人ニテ編集也シニ世人舍人  
親王ヲハ知レ共安麻呂ヲハ十人ヨレハ二三  
ナラデハ知ラズ清人ヲハ知ル人更ニナレカ、  
ル更モ其人ニヨリテ其名ノ傳ハルトツタハラ  
又ト幸不幸ハ古今ニ多カラニ貞丈云紀清人日  
本紀ノ撰者ニ與  
カル更續日本紀元明天皇紀ニハ見エハ與  
カリノ名ヲ出セリ弘私記ノ序ニハ舍人親王  
太朝臣安磨等奉  
勅所撰也トアリ

道鏡ハ法皇也  
三六  
天皇アリ  
モ貴也

一法皇 和學辨云法皇号ハ寬平上皇ニ始マルト  
云ヘトモ實ハ弓削ノ道鏡ニ起レリ然レハアマ  
リイミジキ御名ニハアラジタトヘ祝髮ナサル  
、共太上皇或ハ仙洞ト申奉ラハ誰咎ムル者モ  
アラザラマシ○貞丈云仙洞トハ御所ノ祝号也  
法皇太上皇等ノ尊号ト一類ニハ非ヌ誰咎ル者  
アラジトハ誤リ歟上ヲ咎ル者ハナケレバ也  
一萬多親王 和學辨云姓氏錄ヲ編タマヒシ萬多  
親王コノ萬多ノ和訓イカニ○貞丈云萬多ハ音  
ニテマシダトヨムベシ日本後紀日延曆廿三年  
正月戊寅改茨田親王名ヲ爲萬多ト見エタリ是名

ヲ改タルニ非ス名ノ文字ヲ改メタル也和名抄  
國郡部郡名ニ河内國ノ郡名茨田萬年ト見エタ  
リ然レバ茨田ノ字ヲ改メテ萬多ノ字ヲ用ヒラ  
レタルナレバ萬多ヲマシダトヨム可シマタト  
ヨムハ非也維章ガ博覧ナル日本後紀和名抄ハ  
見ツラニ心ツカズレテ萬多ノヨミヤウヲ知ラ  
ザリシ也

一和學辨 平維章ガ著述也博覧ノ所爲ニテ俗儒  
庸才ノ及ザル所也其書ノ中ツレクハフレニ  
タレドノ章ニ古言ヲ知ラヌエヘノマヨヒ也ト書  
ケリ然ルニ維章モ古言ニハ未ダ達セザリシユヤ

橋ヲハシト濁リノ章ニ中比ノ人ノ文音ニテヨ  
ミチガヒ云ヒチガヒタル事ヲ強テ法ニ立タル  
モオホカメレト書ケリ此文意ニテハヨミチカ  
ヒニテハ語脈通ゼスヨミチガヘ云チガヘト書  
ベキ事也又メレト云詞ハ上ニコソト云フ詞ナ  
クテハ通ゼズタトヘバ子ガハシカルベキ事コ  
ソオホカメレノ類也コソト云フ詞ナクテメレ  
ト云テハ語脈通ゼザル也又魯論ノ鮮矣仁ノ章  
ニ今ノ讀法ヨリ拔群マシナラメト書ケリ是モ  
上ニコソト云詞ナクシテ下ニナラメト云タル  
エヘ通セザル也ケセテ子ヘメレト云フニハ上



ニ必<sup>コ</sup>ソト云詞ヲ置サレハ語結ラザルユヘ語  
脈通ゼザル也古歌ヲ以テ考テ予ガ云フ所ノ達  
ザルヲ知ルベシ是ヲヲ。テニヲハノ法ト云フ也  
法ニハアラズ古言ノ自然ナリ後代是ヲ法ト云  
ヒ習ヒト云フ

一舊事大成經禪僧潮音ガ偽作ノ書也和學辨云攝津ハ本國名

ニ非ズ浪速トモ浪華トモ云ヘリ今ノ大坂ハ西

海道ノ諸列ノ船着ナレバ津ト云ヘリ昔此所ニ

津吏ヲ置リ其役所ヲ攝津職ト云津ヲ攝スル役

ト云フ事也委ク大寶令ニ見エタリ其後桓武帝

ノ時列ノ名トセル事日本後紀并三代格ニ見ユ

タリ大成經ヲ偽作セシ人カ、ル事ヲ知ラズシ

テ昔ハ瀬津國ト云シト書シハ其文旨云ハニ方

ナシ〇桂秋齋ガ説ニ大成經ヲ中ニ這箇ノ二字

ヲ所々ニ用ヒタリ此二字ハ宋朝以來ノ俗語也

聖德太子ノ作也ト云書ニ宋朝ノ俗語ハ右マシ

キ事也ト云ヘリ聖德太子ノ在世ハ隋ノ世ニ當レ

此外精シク穿鑿セハ猶偽作ノ證據多カルヘシ

歴々ノ學者多ク大成經ニ誰サレタリ大成經ノ

本經刊行シテ廣ク行ハレ學者引用タル事有

一國名 和學辨云伊賀變ジテイガトナリ伊勢變

シテイセトナリ志摩變ジテイマトナリ駿河變

シテスニガトナリ又變シテスルガトナリ武藏  
變ジテム、サシトナリ又變シテムサシトナリ  
安房變ジテアハトナリ飛驒變ジテヒダトナリ  
信濃變シテシノントナリ又變ジテシナノト  
ナリ佐渡變ジテサド、ナリ但馬變ジテタシマ  
トナリ美濃變シテミノトナリ因幡變ジテイナ  
バトナリ播磨變シテハリマトナリ安藝變シテ  
アキトナリ讃岐變ジテサヌキトナリ伊豫變ジ  
テイヨトナリ壹岐變ジテイキト成リ對馬變ジ  
テツイマトナリ又變シテツイマト成ル中華ノ  
音ニナラヒシ證據也是ヲ真ノ漢音ト云フ今世

ノ學者ノ漢音吳音ト云フハ大ナルチカヒ也唐ヨリ  
以前ハ漢音ト云ヒ唐ヨリ以後ハ唐音ト云唐音  
漢音一致也今世ノ漢音ト云フハ段々アヤマリ  
來リテ漢ニテモアラズ吳ニモアラズ和音ノ一  
種トナレリ又云平上去入撮口合口開口ニテヨ  
ム事ヲ今ノ人ハ皆知ラズ何レ是ヲ漢音ト云ハ  
ンヤタトヘハ朝ノ字ノ唐音ハチヤウ也今是ヲ  
チヤウト誤レリ東ノ字ノ漢音ハトシ也シノ片  
カノ出來ザルマヘニウノ假字ヲ借リテトウト  
付シハトシトヨマセン爲ナルニ後世誤テ東ヲ  
トウト讀ム〇負丈按伊賀ハ唐音ノイ、ガタヲ

借ラズ志摩ハ唐音ノシイマアヲ借ラズ吾國ノ  
音ヲ以テイカシマト書タル也餘モ是ニ准ジ知  
ルベシ日本紀持統天皇五年九月己巳朔壬申賜  
音博士大唐續守言薩弘恪書博士百濟宋士善信  
銀<sub>下</sub>人二十兩ト見エタリ此年ハ唐ノ代宗ノ嗣聖  
八年ニ當レリ是吾國ニ音博士ヲ置テ唐人續守  
言薩弘恪等ヲ招キ留テ音博士トナシテ唐人音  
ヲ教授セシメラレ大學寮ノ儒生是ヲ學ビ傳ヘ  
タルカ今世ニ傳レル也然ルニ吾國ノ音ト後代  
明清ノ音ト相違アリ年代遙ニ歷タル事ナレバ  
吾國ニテ傳ヘ誤リタル事モアル歟西土ニテハ宋

朝以來胡狄支那ニ多ク入り留テ國ヲ爭ヒ終ニ  
北狄ノ爲ニ大明滅サレ韃靼人天子トナリ國ヲ  
清ト号シ韃人國ニ充滿シタレハ古ノ音ト韃靼  
ノ音混合シテ今ノ唐音ニナリタル事モアル歟  
考ヘ正シタキ事ナリ偏ニ吾國ノ音ハ誤ニシテ  
今ノ唐音ハ昔ノ漢唐ノ代ノ音ニ易ル事ナレト  
云證ナシ〇又云。シノ片カナ出來ザル前ニウノ  
カナヲ借リテトウト付シハトントヨマセンタ  
メ也トハ無理也。シノカナナキ時ハムノ字ヲ用  
フ。ムハ古ヘヨリハ子タル詞ニ用ル也ハ又ル詞  
ニ。ウヲ書ク事方葉集ナドニモ例ナキ事ナリ

一 梶原氏家紋 源平盛衰記卷三十五義經院參ノ  
條ニ云大文字三ツ、書タル直垂ニ黒糸威鎧ハ  
同國住人梶原平三景時子息景季生年二十三ト  
名乗ル〇土佐國主山内氏家臣ニ大庭源之助ト  
云フ者ノ家ニ古キ幕アリ先祖ノ幕也ト云傳フ  
其幕ノ紋大ノ字ノ下ノ傍ニ二ノ字小ク書タリ  
大ニ如此ノ紋也梶原ト大庭トハ同家也故ニ名  
乗ニ兩家共ニ景ノ字ヲ付也故ニ幕ノ紋ニ大ニ  
ヲ付ルナルヘシ彼源之助カ家ハ庶流ナル故姦  
ヲ用スシテ下ノ大ノ代リニ大ノ下傍ニ二ノ字ヲ  
用ルナルヘシ二ノ字ヲ大キニシテ大ニ如此シ

テハニツ引兩ニ似タレハ大ニ如此シタル歟  
一 雞ト鼠ト 史記封禪書曰亦祠天神上帝百鬼而  
以雞ト鼠ト註曰漢書音義曰持雞用ト如鼠ト正義  
曰雞ト法用雞一狗一生祝願訖即殺雞狗煮熟又  
祭獨取雞兩眼骨上自在孔裂似人物形則吉不足  
則凶今嶺南猶行此法也  
一 太占 古事記曰爾天神之命以布斗麻尔ト相而  
詔云云又曰召天兒屋命布刀玉命而内拔天香  
山之真男鹿之肩拔而取天香山之天邊々迦而令  
占麻迦那波〇日本純一書曰時天神以太占而ト  
合之卷上又曰上天兒屋命至神事之宗源者也故

得以下太白之事奉仕

一竈輪ハツレワノ台米台ミヤノ古語拾遺曰於是大地主神令カクニナキ片巫

志此肱ヒデ巫カキキ及米台也今俗竈輪台求其曲カク○志止止利カク毛台人

名歟

一龜ウツトウラ日本紀十九代欽明天皇二十四年六月遣内臣ヲ關

使於百濟中略云略又ホク上書曆本種々藥物可ヲ付送一

ト見エタリ此御代龜ノ書ヲ求メ給ヒシ也此紀

ヨリ前崇神天皇紀七年命神龜ノ三字アリウ

ラヘテト割ヲ付タリ是ハタバウラナフト云義

ニ依テ命神龜ノ三字ヲ借リテ文ノ飾ニ用ヒタ

ル也此時龜トアリシニハアラズ如此ノ事文ノ

見ヤウニテ大ヒ義ヲ取ソコナフ事アリ仍テ記  
之置クナリ

一五月五日百草ヲ取テ黒焼ニス功能多シ百草ハ

何々ト定リナシ紫苑シヲニ共云フ真列ニ夕ラ

ヒ夕カラシ共云フトウ夕イ草ク夕共又ドフ

此三草ヲ百草ノ中ニ入ル、事アルヘカラズ

ト申し習シタリ忌ヘシ瘡病ノ發リ日未明ニ百

草黒焼五分其草粉一分交テ汲立ノ水少ニテ吞

メバ瘡落ル也但四五フルヒノ後ニ用之此外能

多シ

一楚割 スハヤリトヨム木ノ楚スハノ如ク魚肉ヲ細

長ク割テ乾タル也ズハエワリヲ畧シテズハヤ  
リト云也ソワリトヨムハヨミヤウヲ知ラヌ也  
鮭ノ楚割ハ東鑑庭訓往來等ニ見エタリ鮭ノ三  
ニ限テズ延喜式ノ神祇式齋宮月料條ニ鮭楚割  
鮭楚割アリ又正月三箇料条ニ楚割ノ鮭アリ  
一 味噌 右同條ニ味噌一斗二升トアリミソ也  
一 柏夾 カハサミ 冠ノ纒ヲ内へ卷テ木ヲワリカケテハサ  
ムヲ卷纒ト云フ夾木ヲ墨ニテヌル是武官ノ人  
ノスル事也柏夾ト云ハ纒ヲ外へ卷テ木ヲワリ  
カケテハサム夾木ヲヌラズ是ハ禁裏焼亡地震  
雷鳴等非常ノ警固ノ時又ハ旅行ナトニ武官ノ人

西条三条抄  
ニ柏夾ノ時  
イノコキヤウ  
味ハ外ヲワリ  
ワハ内ヲワリ

ノスル事也柏夾ノ事ハ禁秘抄次將裝束抄雅亮  
裝束抄後照念院殿裝束抄傍抄等ニ見エタリ参  
考スヘシ〇橘嘉樹云柏夾ノ事ト滋野井亞相公  
源公よ尋子奉リシニ作云近ク一向柏夾ノ儀云  
之者ハ内裏炎上ノ夜又神輿入洛ホの時ハ必柏  
夾ありき是ハ急速あり事反檢倉の人ト云  
も夾ト又竹ふとわく用られしや笑し夾やしも  
色々の儀あはれも強く定りし事もあるや也  
己よ是年内裏焼亡の夜も柏夾の沙汰一向よき  
ゆいしと傳ありき又是日亦の使も幕内の侍也  
社頭ありし安海うして關腹の束帯ありしと云

子イヲアケル  
陽九ニテム  
ニエタリ



ゆき柏の字取用云成也行番ニ外居ノ字ヲ右

をしのの略格と云ハ予が新考也右の装束抄は是を

りりその事也と云ふ付く考へも多也○又云申將

少將而く式正の時ハ巻端たりきも常りりる少將

也急速非常の事あれば巻端とらりりる相交す

る也申少將の介ハ常々巻端ありハ相交す及る

あり○又云相交ハ假り暫くの間ハ事あれば夾木

と云ふゆすそそも同くありし

一へツクリ 曾丹集貞丈云曾丹ハ曾赫云 魚つく

るが頃收の量とらる人ハ落乃上名とありゆんや

そ魚つらるゆふとせよもふ難波江の若多とこ

けてあそふ落の子 或人ハ魚のつらハ何れも同

ふ予いさし知す遊と尋ぬへし落の起魚のつらと

云ねハ落のつらとをさきねとゆりや

一 纒綾 礼記檀弓云裏冠不纒註冠必有笄以貫之

以テ紘カケテ繫テ笄ヲ頤ニ而シテ下ル結ス之ヲ日ニ纒ル垂ル其餘於前者謂之ヲ

纒ト見エタリ纒ハ冠ノ緒也頤ノ下ニテ結フ其

結餘リノ垂レ下リタル所ヲ纒ト云也此方ノ纒

エニ 纒オヒト同エカラズ此方ノ纒纒掛

一 被為 假令ハ為人笑人ノ人ノノワラヒニヲラハルトキヨム



被人笑人ノ人ノノワラヒニヲラハルトキヨム 是ニテ被為ノ字ノツカヒ

ヤウ明也為人被笑カクノ如ク書ハ用字ノ法ニ

義後附ニ為ニ平  
去ニ吾アリトナスハ  
平聲ニシテ列ノハ去  
声ノ貞丈子未ク考  
コトニ及ハザルナ  
爲人所笑トモ書



アラズ

一花ガツ三 住吉慶舟云天満天神ノ像ノ袍ノ文  
 藻ニ花カツ三ヲ画ク此文土佐光長カ画ケル年  
 中行事ノ繪ニモアリト藻ハ  如此也花カ  
 ツ三ハ  如此画ク也藻ハカラクサノ如ク散  
 テ其間々ニ花カツ三アリ此花カツ三ノ文カ夕ハ  
 三ノ如クニテ四ヒラアリ 眞淵氏 同部 衛士 力説ニ花  
 カツ三ハ田字草ノ事也田ノ字ノ形ニ似タリト  
 云フ貝原氏カ和爾雅之 字ナリ 蘋ノ字ノ注ニ四葉草田  
 字草並同 花名 白蘋ト見エタリ○負文曰古今集  
 戀ノ部ニヨ三人ニラズ 三子ノクノアサカノ又

マノ花カツ三カツ三ル人ニユヒヤワタテニ。采雅ノ  
 抄ニハナカツ三ハ薦ノ花也ト見エタリ薦ノ花ハ  
 ス、キノ穂ニ似テ色白シ實ハ朝鮮キヒ キビモ  
 トモ云フニ似タリ然レハカノ画ニ云ヘル花カツ三  
 ト歌ニヨメル花カツ三ハ同名異物ナリ 田字草  
 ハナカツ三ト云フハ葉ノ形 四ヒラニテ花ノ形ニ似タルハナルニ  
 一鱈 タラトヨム此字ハ字書ニナシ吾國ニテ作  
 リタル字ナル故訓有テ音ナシ支那ニハ鱈ナキ  
 故文字モナキ也朝鮮ニハ此魚アリ大口魚ト名  
 付ク又一名吳魚ト云フ朝鮮人ノ著シタル東  
 醫寶鑑ト云フ書ニ見エタリタラト云フ字ハ字

書ニモ本草類ニモ支那ノ書ニ無ケレバ漢名モ  
正字モナキ也我國ニテハ鱈ノ字ヲ用ユベシ然  
ルニ鱈ノ字ヲ不用シテ朝鮮ノ大口魚天魚ノ字  
ヲ用ル人アリ何少我國ノ字ヲ捨テ隣ノ國ノ字  
ヲ用ルヤ朝鮮ハ支那ニ近キ國ナル故用之歟江  
戸日本橋ノ儒者ガ居ヲ品川ヘ移シテ支那ヘ一  
里近クナリタルト云テ悦ビシト云フ類ノ輩ハ  
鱈ノ字ヲ用ル莫ク好マサル也抑此ノ人ハ唐人  
ノ屎ヲモ箱ニ納メテ寶物トスルナルヘシ  
一雷 論語鄉黨篇曰迅雷風烈必變朱喜註曰所以  
敬天文怒ト 貞丈曰朱子ハ天ノ心ヲ能ク知テ云

ハレニ歟推量歟知ラズ天モ人ノ如ク怒アラバ  
愁モアルベシ樂ニモ悲ニモアルベシ晴天ハ樂  
三ノ時カ曇ルハ愁ノ時歟雨フルハ悲ニノ時歟  
雪箱ハ目クソ歟鼻クソ歟電霞ハ身ノ垢歟予理  
ヲ究メズ蒙昧ナル故是等ノ事明ラノ知ラズ  
一鳴弦墓目與義 鳴弦ハ上古ヨリアル事ニテ弓  
ノ弦打スル事也中古以來墓目ノ矢ヲ放テ妖怪  
ナトヲ退ル事アリ白河院御トノコモリ玉ヒテ  
後物ニオソハレサセタマフ事アリケルニ然ル  
ヘキ武具ヲ召スヘシトテ義家朝臣ニ仰事アリ  
ケレハ黒ヌリノ檀弓ヲ一張マ井ラセタリケル

義後指之法皇時  
神經病アリ義家  
弓ヲ奉ルニ及ビ心ニ  
其人ノ武威ヲ恃ニ  
以テ平鶴ニ至ル

ヲ御枕ノ上ニ置セタマヒシカハ御惱忽平愈シ  
タマヒシト古事談宇治拾遺等ニ記セリ義家ハ  
鳴弦モセズ墓目モ射ス唯持タル弓ヲ捧ケテ御  
枕上ニ置セラレシバカリニテ妖怪ニオソハレ  
タマフ事ハ止タリ是義家ハ武徳アリシ人ナル  
カ故ニ其驗アリシ也義家ノ武徳ノ盛ナル事ハ  
天子ノ貴キ御位モ及バセタマハザリシ也是ヲ  
以テ考へ見ベシ鳴弦墓目共ニ武徳ヲ備ヘタル  
人ノ行フニ非レバ其驗アルベカラザル事ヲ悟  
ルベシ鳴弦墓目ノ作法流々サマク有テ互ニ彼  
ヲ非トシ是ヲ是トシテ相排トモ其作法ニハ依ル

ヘカラス武徳有テ正シクスルドナル勇氣ヲ以  
テ邪氣ヲ抑ス故邪氣退ク可シ武徳モ無キ人ノ  
行フハ驗モナク耻ヲ招クベシ武士タル者耻ヲ  
得テ生キテハ君ラルベカラズサレバ武士ハ平  
日ノ行儀ヲ正シクシテ身ニ武徳ヲ備フベキ事  
也行儀正シカラズシテハ身ニ武徳ハ備ラサル  
也此武徳ハ文徳ヨリ出ル也武徳ハ鳴弦墓目ノ  
奥義也カノ作法ノ是非ヲ論シテ作法バカリニ  
テ驗ヲ得ントスルハ浮氣ナリ作法ニ拘ル事勿  
レ作法ハナクテモ也近年神主山伏ノ類墓目鳴  
強ノ祈禱ト号シテ是ヲ行フ者アリ彼等如キ何

ノ武德アラニヤ又浪人ナド是ヲ以テ渡世トス  
ル者アリ妖術ヲ行ヒ狐ヲ使ヒ人ニ狐ヲ付ケテ  
アトカラ廻リテ蕃目鳴弦ニテ狐ヲ離シテ金銀  
ヲ掠メ取ル奴モアリ是等ノ輩ハ弓矢ヲ穢ス大  
賊也彼等ガスル事ヲ信用スル事勿レ唯奥義ハ  
武德ニ在ルノミ

一 都牟刈之大切 古事記ニ見エタリ出口延佳ガ  
頭書ニ都牟刈未詳トアリ 負丈云都牟刈ツニ  
カリトヨムヘシ延佳削点ガリヲ約ムレバギト  
ナル也音ガリノ切然レバツニガリハツニキ也ツ  
ンギヲツルギ共云フ也

一 八坂瓊八咫鏡 朝廷ノ神器ノ外ニ又別ニ此二  
物ノ名日本紀ニ見エタリ垂仁天皇八十七年紀  
曰昔丹波國桑田村有人名曰瓊襲則瓊襲家有犬  
名曰足往是大咋山獸名牟士那而殺之則獸腹有  
八尺瓊勾玉因以獻之是玉今有石上神宮○景行  
天皇紀曰爰有女人曰神夏磯媛其徒衆甚多一國  
之魁帥也聆天皇之使者至則接磯津山賢木以上  
枝挂八挂劍中枝挂八咫鏡下枝挂八咫瓊亦素幡  
樹于船舳參向○仲哀天皇紀曰八年春正月己卯  
朔壬午幸筑紫時岡縣至祖熊野聞天皇車駕豫拔  
取百枝賢木以立九尋船之舳而上枝挂白銅鏡中

枝掛十握劔下枝掛八尺瓊參迎于周芳國沙磨之  
浦○同紀曰筑紫伊觀縣王祖五十迺手聞天皇之  
行拔取五百枝賢木立于船之舳艦上枝掛八尺瓊  
中枝掛白銅鏡下枝掛十握劔參迎于虎門引嶋而  
獻之因以奏言臣取所以獻是物者天皇如八尺瓊  
之勾以曲妙御宇且如白銅鏡以分明者山川海原  
乃提是十握劔平天下矣○雄略天皇九年五月紀  
曰小鹿火宿禰從紀小弓宿禰來時獨留角國使  
倭子連奉八尺鏡於大伴大連而祈請曰云云右ノ  
八尺鏡八尺瓊ハ神器ノ物ニハ非ス○又按賢木  
ニ鏡劔玉等ヲ掛テ獻スル事是上古王師ヲ迎ル

ノ礼物ト見エタリ大舌ノ風俗也

一犬猫ニ名ヲ付ル 右ニ引ク所ノ日本紀ニ癩襲  
家有犬曰足往トアリ清少納言ノ枕草子ニ猫ヲ  
命婦ノ御モト、名付ケ犬ヲ翁九ト名付ケシ事  
見エタリ馬鷹ナドニ名ヲ付シ其例多シ生物  
ノ外弓矢太刀刀鎧冑等ニモ名ヲ付ル事アリ又  
草木等ニモ名ヲ付ル事アリ

一療痘 痘瘡ハ食傷或風邪感冒等ノ熱ニ乘シテ  
發起スル者也勢強ケレバ發シ盡ク熱弱ケレバ  
發シ尽サズシテ内攻スル也痘皮裏ニ在テ發起  
セズ或ハ發シテ後痘根紅色變シテ白クナリ痘

頂黒陷ス是皆勢弱ク發勢緩ナル者也溫劑ヲ以テ  
發勢ヲ助ケテ痘毒ヲ發表セシムベシ此等ノ症  
ハ或臍帶ウツク或紫荷車ムナ或人血ツマ或柳蠶等ヲ剪シ服サ  
シムベシ或酒ヲ吞シムベシ皆妙効也是經驗ス  
ル所也近年庸醫一ウ角ウニコスルル俗ヨヲ用ル事ヲ  
好ムハ誤り也一ウ角ハ毒ヲ解スルノ神藥也食毒  
ニハ音也痘毒ニハ却テ惡シ凡解毒ノ藥性皆寒  
涼ナラサルハナシ一ウ角モ性寒涼也其寒藥ナル  
一ウ角ヲ服セシムルニ因テ勢醒メテ發起ス  
ル勢脱シテ終ニ死ニ至ル也キビ緊シク發表スベシ  
右ノ如クナル症ニ調合ノ藥ハ甚緩ス右ニ記ス

所ノ臍帶以下ノ物ヲ剪シテ多ク吞シムベシ酒  
ヲモ吞シムベシ又彼品々ヲ一ツニ合セ剪シ用  
ルモ藥勢強カルヘシ酒ハ痘ノ良藥也食物性  
ハウ忌ムル既ニ痘發起シ尽サバ右ノ藥ヲハ止ベシ  
酒モ止ムベシ嘗テ聞ク或貪家ノ小兒痘發シ夕  
レドモ起張セズシテ死ス貪ナレバ摺作ル夏モ  
ナラス酒樽ヲ末メテ死骸ヲ入レ夜ニ入テ葬セ  
ント欲ス夕日ノ此小兒蘊生シテ樽中ヨリ母ヲ  
呼ビタリト是レ酒氣ニ蒸カレテ痘發張シタル也  
一胡床床机 胡床ト。床机トハ一物ニ非ス別物  
也貝原好古ガ和事始ニ胡床俗云床机ト記シ新

井氏が軍器考ニ床凡ト云フ物ハ古ノ胡床也ト  
胡床今モ格樂ノ鼓等カ腰カクル物也是ヲ俗ニ床机ト稱スルハ誤也

記ニタルハ誤リ也床机又床机トモ書ク又床子

トモ云胡床ノ名日本紀神代卷ニ見エタリ去レ

共唯腰カケタル事ヲ云ハニトテ後代人胡床ノ

字ヲ借り用ヒタルヘシ又禁延ニ公事行ハル

時官人腰カクルニ胡床モ床子一名兩品共ニ用

ヒラル内裏儀式ニ床机床子ト記夕モ胡床モ

見エタリ今モ兩品用ヒラル也

一内侍所神鏡燒損 百練抄卷四云六十八代後朱

雀院長久元年九月九日皇居上東門院貞丈云去

六月廿七日内裏燒亡主上先御法成寺東金堂廊

内侍所神鏡在灰燼中燒損神鏡在灰燼中遺藏人

頭左中將資房尤少將經季等令求之僅奉唯奉得

御鉢燒損五寸許御奉裏入折纏人得一切寸許其鉢燒

損不分明云云次得二三寸許各々段々也又如金

玉之物數粒得之隨又奉加入彼櫃也十日内侍所

女官二人夢想云一人夢云彼本所有小地頗有惱

氣之一人夢云彼本所有人云吾相離獨身在此處

云云仍女官等向彼所奉鑿末之處如金玉之物數求得三

粒即奉入畢有靈驗可感歎云云已上見資房師記

○貞丈云天照大神ノ授ケタマヒ鏡ハ今伊勢

ノ神鉢也長久元年燒亡鏡ハ第十代崇神天皇

ノ時神代ノ鏡ヲ模シ作ラレシ鏡也又天照大神  
ノ按ケタマヒシ天薙雲劔ハ今尾張熱田ノ神躰  
也安徳天皇ノ時西海ニ沉ミ失シ寶劔ハ是モ崇  
神天皇ノ時神代ノ劔ヲ模シ作ラレタル劔也天  
子ノ御寶ハカノ模シ物ニテ右ニガ鏡ハ長久元  
年ニ燒亡ヒ劔ハ西海ニ沉ミ失タリ今存侍所ト  
云フハ長久元年ニ燒亡タル鏡ノ關ケ曆ヲ集メ  
納メタル也

一 雙六采入 百練抄云長保院一條五年八月二日雙  
六采入第二内親王、皇内僧慶圓加持之出之給度  
者、負丈梅第二内親王ハ一條院第二皇女媛子

内親王也長保二年十二月十五日降誕長保五年  
二ハ齡四歳也雙六采生長ノ人ノ皇女ニモ入ルベ  
カラズ況ヤ四歳ノ皇女ノ皇ノ穴ニ入ベカラス  
前陰ノ中へ入りタルヲ女房隠秘シテ皇内ニ入  
ルト云ヒタルナルベシ加持ノ驗ハ有ヘカラス  
女房ホリ出シタルナルベシ  
一 裾寸法 百練抄云後堀河院寛喜三年四月廿四日  
若宮御百日也今日出仕ノ人々裾寸法事内々爲  
頭中宮亮資頼朝臣奉行被仰下大臣八尺大納言  
七尺中納言六尺参譏三位五尺四位上下四尺云云  
一 礼服御冠 百練抄云後嵯峨院仁治三年三月八



一 日庚寅礼服御覽天子御冠破損無其形仍可被新調云云

一 戴餅イタヤキ百練抄云後嵯峨院寛元三年正月一日今日

日春宮御戴餅也大夫公相御奉抱之傳持之御所

近々之間無御劔役人云云戴餅ノ事紫式部日記古事記桃掌茶葉其外

古書ニ多見エタリ小兒ノ悦事ナリ

一 移風易俗 負丈云移風易俗ト云フハ聖人教ヲ

施シテ惡シキ風俗ヲ善キ風俗ニ移シ易ル事ヲ

云フ也聖人ノ教ハ時代ノ風俗ニ隨テ惡シキ風

俗ヲハ移シ易工惡カラヌ風俗ハ改ルニハ及バ

ザル也然ルニ今ノ儒者ハ吾國ノ風俗ハ賤シキ

風俗也ト思ヒ今日ノ世俗ノ人事ヲハ何事モ鄙

俗也ト云テ万事唐人風ニ改メニ事ヲ好ムハ聖

人ノ道ヲ知ラヌ者也聖人ノ道ハ其國ノ風俗ニ

乖テ唐人ノ風俗ニ成レト云フ教ニハアラス孔

子今日本ニ渡リ給ハバ月代剃テ麻上下ニカ脇

差サシテ孔左衛門ナド、名ヲ付キタマフナルベシ

一 謚 謚字オクリナトヨム説文ニハ謚ニ作ル今

ノ文謚ニ作ル誤也オクリナノ時ハ音ニ也韻會

小補云本韻常利切音又伊志切音又云陌韻伊昔

切音集韻笑典ト見ユタリエキノ音ニヨメバ笑

フ貞也オクリナニハナラズ謚号ヲエキ号ト云

フハ誤リ也エキノ音ハ謚ヲ謚ニ作リヨリ益  
ノ聲ニ諧テエキノ音トスルナルハ後代ノ音  
ナラン

一不遑毛舉 先年予友山岡俊明間曰庭訓往來ニ  
不遑毛舉ト云フ文アリ此毛舉西土ノ書ニ不及  
見如何予答曰蓋我國ノ俗語歟ト而其餘年心ニ  
志ル、事ナカリ今日史記評林ヲ讀史總評ヲ  
讀テ不慮ニ毛舉ノ字ヲ見得夕リ總評ニ王維積  
日遷史之文或由本以之末或操末以續煎或繁條  
而約言或一傳而數事或從中變或自竊入意到筆  
隨思餘語止若此類不可毛舉竟不得其要領ト見

王維積  
朝人字元  
亭草刈人

エ夕リ然レバ我國ノ俗語ニハ非ズ尚是ヨリモ  
古キ書ニ有ルベケレ共管見ナレバ知ラズ毛舉  
毛ハ筆ノ毛也筆ニカキ尽サレ又ト云フ事ナリ  
不能廢毫ナド云モ毫ハ筆ノ毛ノ事ニテクサ  
レタル筆ニテハカキワケサレズト云フ事ナリ  
不可毛舉ト云フ語余リ多クハ聞ナレヌヤウニ  
思フハ予カ管見  
ノ故ナルヘシ

一柳箱 柳木ヲ細ク三角ニ削テ紙捻ニテ編テ答  
ニ作ル冠杵ナトヲ戴ルハ其蓋也又別ニ一種アリ延喜式内匠寮式ニ年料柳筥一百六十八合  
六寸已下料柳一百三連山城國織筥料生絲一十  
一尺以上料柳一丈漫柳料高布一段トアリ織字  
ニ付ヲ考ルニ是ハ前ニ云三角ノ木ヲ編テ作ル

トハ別也。是ハ蒲柳ノ細枝ヲ以テ生絲スム練ネナル也。  
 ニテ織テ作ルナルベシ。編ムヲ織トハ云々ニキ  
 也。巾料トアルハ其蒲柳ヲ洗テ拭フ巾也。浸柳料  
 トハ筥ニ作ルニハ折リ曲ルユヘシ。メリヲカク  
 ウルホシテ折ルユヘ水ヲ浸ヌ巾也。此柳筥ハ今  
 世間ニ用ル柳ロリノ事ナルベシ。三角ニ削ハヤ  
 ナイバエト云  
 蒲柳ニテ作ルハヤナギバ  
 エト云。依イナシラズ  
 一、女并札 延喜中務省式女官季祿之條云。宣訖、轉  
 還、退、賜男官時服、女官降座、再拜。注云用扱地并謂  
 著兩手於地、首不至於地。他皆効之。訖各復座。  
 一、戶籍 同式云。凡京職及諸國所進戶籍皆令涂黃、

但大宰管内諸國不在此限。若有未進者、移送民部省、拘留調庸  
 稅帳返抄。

一、宣命紙色 同内記式云。凡宣命文者皆以黃紙書。  
 一、文但奉伊勢大神宮文、以縹紙書。賀茂社以紅紙書。  
 一、位記 同内記式云。凡裝束位記式、神位記三位已  
 上、縹紙。綠、縹、雜、綺、帶、黃、楊、軸、親王位記者白紙、表白  
 吳綾、裏紫羅、縹、緋、綾、裏雜綺、帶、赤木、軸三位以上者  
 縹、紙、綠、縹、雜、綺、帶、黃、楊、軸五位已上者白紙、白縹、白  
 帶。女亦同但僧都已上 又曰。納位記料、草筥八合  
 綠箱八尺。帶結菅並隨損舟内侍、奏受内藏寮。貞丈、梅  
 比草筥  
 二、位記ヲ入テ筥共ニ下サル。ニアラズ。是ハ位  
 記ノ卷物ヲ作テ内記ノ方ニ納メ置ナルハシ。

凡納贈位記料柳筥臨時受内藏寮

一書封字 同内記式云凡賜渤海國勅書函臚上書

封字函上頭書中務省三字唐土ノ書簡モ臚ニテ付ルナリ臚ニテ付ルハ水

唐土ノ書簡モ臚ニテ付ルナリ臚ニテ付ルハ水

書ク更上古ヨリ

一短冊 同主鈴式云飛驒儲料畧檜函北合短冊七枚

一按案 按从手案从木共ニカンガウルトヨム字彙

云按考也正韻彙篇云案考驗也

一皮草韋 皮カハ草カハ韋カハ 韻會小補皮字注生曰

皮理之曰草柔之曰韋生トハ剥取タルマノ毛皮

也理トハ毛ヲ削去リテ滑スルヲ云草也韋ノ面ヲ

削り去リテ柔ニシタルヲ韋ト云フ今世俗ニ漫ニ

皮草ノ字ヲ混ジ用テ韋ノ字ヲ用ル事ナシ

一小忌書摺 延喜縫殿式云新嘗祭小齋諸司書摺

布衫三百十二領細布一百並別二丈一尺一尺 雜紐

料四丈貨布六端一丈二尺別長二尺二寸 山藍五十

四圍斗横飯料米二斗四升八勺ト見夕リ書摺白

布ニ山藍ノ葉ヲ以テ書ク文様ヲ摺リ付ル也山

藍ハ常ノ藍ニハアラズ透骨草也模トハ文様ヲ

板ニ彫タル木形也横飯トハ飯ヲ稠ク糊ニシテ

布切レ一包テ模ノ面ヲ打テ模ニ糊ヲ付テ其上

ニ白布ヲ被テ布ヲ押シ付レハ文様ハ高ク其外



